家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

第七十五巻　第三号　日本幼稚園協会

3

待望の全巻がそろって登場です!!

全６巻別冊索引付

保育カリキュラム資料

各800円　フレーベル館編

新刊！→ ６《小事典》

☆子どもたちとどうやって接していこうか、
☆あしたのカリキュラムには、何をもりこもうか、
☆どうやって子どもたちを喜ばせようか、
と毎日、頭を悩ませている、保育者であるあなたへ
おくる最良の《小事典》です。

「年間の生活」と題して１年間の行事・自然・子どもの生活を、検索に便利なように各月１ページごとの表にまとめました。また、子どもに与えたい本にはどんなものがあるかという「子どもの本」、すばらしい保育者となるための「保育者のための本」などのユニークな項目を充実させています。その他にも「動物を飼う」「植物を育てる」「応急手当」などの必須事項はとくに詳述しています。

〈内容〉

年間の生活／レコード・歌／スライド・紙芝居／子どもの本／絵画製作／動物を飼う／植物を育てる／自然遊び／視聴覚教育のための機器／遊具／健康な園生活／障害をもつ子ども／保育者のための本／統計資料／あると便利な小物一覧

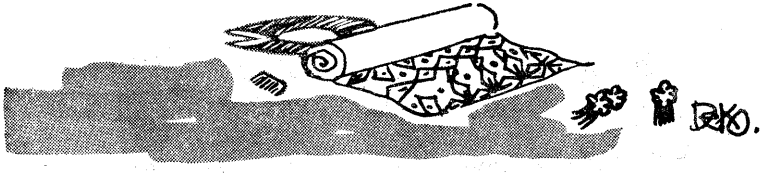
―――― 既刊・保育カリキュラム資料・１～５巻 ――――

① 春（４月、５月、初めての園生活）
② 夏（６月、７月、８月、夏休み）
③ 秋（９月、10月、11月、運動会）
④ 冬（12月、１月、２月、３月、進学の準備）
⑤ 遊び

フレーベル館

幼児の教育

第七十五巻　第三号



幼児の教育　目次

——第七十五巻　三月号——

表紙　永瀬善郎（「もの想う天使」）

カット　中島英子

©1976
日本幼稚園協会

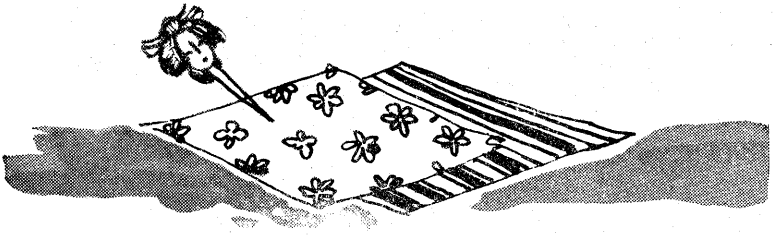
随想……堀内康人…（4）

私の保育……川崎千束…（6）

私の幼児教育論（二）……清水美智子…（11）

「日本幼児保育史」研究余滴（三）……水野浩志…（20）

◇河辺杲先生と◇一問一答……（26）



★講演

これからの世界と日本の子ども（二）……矢島釣次…(30)

ことばの相談……増井美代子…(37)

私の幼児教育論XV……神沢良輔…(44)

人でつづる保育史　中川花代先生をお訪ねして……赤間峰子…(48)

結ぶ……寺井美奈子…(52)

むすぶ……中本愛子…(53)

人と人をむすぶ……片岡霊恵…(55)

むすぶ—そのもどかしさ—……早川満寿子…(57)

〝結ぶ〟ということ……笹沢園子…(59)

結ぶ—出発と終息の十字路—……本田和子…(62)

随想

堀内康人

どうしたことか最近になって、しきりに、若い頃読んだ多くの詩人たちの詩の一ひら一ひらが秋の木の葉が散るように頭の中に舞い落ちて来て、そうだもう一度しっかり読み返して見よう、などと思うようになった。ソビエトの有名な詩人が、ガス管をくわえて自殺した、それは若者の間に人気のあった、エセーニンであった、彼は長い詩の最後に、〃生きることはいとやすきこと、死することはいとかたきこと〃と結んで死んだ。そのエセーニンの死をいたみ、これまた有名な詩人、マヤコフスキーは、長い詩をかいて、その詩の最後に〃遊星はまだ仕上げが足りぬ、死することはいとやすきこと、生きることはいとかたきこと〃と結んだ。

十二月九日の夕刊に、体が弱く、学校がいやになった十二歳の男の子が、明るい、にぎやかな性格であったが、洋服ダンスの取手にタオルを結んで自殺をしたことが報ぜられた。日本では老人の自殺はいうにおよばず、青年そして近頃はこうして子どもまでが、自分の生命を自分で絶つことが珍らしくなくなった。まさに日本の現実は自殺的環境である。私はマヤコフスキーの詩の断片を想い起し、そして幼い子どもたちを教育する人たちを目に浮べながら、こんなことを考えている。

何十億という人類が生きている地球という遊星は、何百年何千年ではなく、十年二十年という近い将来、どうなることであろうかということがあらゆる面で心配されている。幼児教育にたずさわっている人なら、エレン・ケイがいった〃児童の世紀〃という言葉は誰一人として知らぬ人はいない。けれどこうなるとなにが一体児童の世紀なのか問い直す必要は

ないだろうか。子ども子ども一点張りではなく、大人も生きることのむずかしい世の中が、もうそのへんまでやって来ているのである。西洋優位の終幕を見通し、中国が世界の基軸になるであろうといって死んでいったトインビーがどうして、そんな結論に至ったのか、地球上の文明の崩壊をくいとめるものはなんなのかを考える必要はないだろうか。そうしたことを考えながら、幼児の教育を考え直すことの必要性を大切にしたいのである。幼児は遊びの中で、その心身を発達させて行くことは誰も否定できないが、この世界は遊びの楽しさだけでは崩壊してしまうので、子どもも大人もいっしょになって宇宙を発展させなければならないことを、どのようにして子どもに知らせていったら良いのか、その具体的プログラムが、日常の保育にどんな形で組み込まれているかを真剣に考える時がやって来ているように思うのである。金魚鉢の金魚の水をかえ、餌を与えて世話をすることも結構、しかし私どもが足をおろしている大地の下でミミズはその細長い体の何百倍もの土をたべながら、草木の育つ土壌を目に見えない所で耕し、草木は大地に根を張り、バサバサかをがっちりと結びつけていること、赤い鳥小鳥を歌いながら、鳥と木の実の自然がどんなに調和的にその生命活動を発展させているかということ、蝶ちょ蝶ちょ菜の葉にとまれを歌いながら、この可憐な虫と菜の花の一生が、いわば生活上の同盟でもあることへの認識をどのように感動的に与えることができるであろうかということ、など……は、ただ子どもの遊びを楽しく展開させればそれでよいのだという考えとは次元のちがうことであるように思われるのである。

間違って教育された大人たちは、自分たちの楽しさだけを追い求め、自然を破壊しそのむくいが自分たちの生命活動を困難におとし入れていることによやく気づいて来ている。マヤコフスキーの歌ったように〝遊星はまだ仕上げが足りない〟〝生きることは死ぬことよりもむずかしい〟、それを子どもの次元では、自然は人間をふくめて調和的いとなみの中で生きて行くのだということを、人間の文明社会と結びつけて、もっとも強く感じとらせていけないものだろうか。

（東京家政大学）

私の保育

川崎千東

(一) 自讃

東京家政大学付属みどりヶ丘幼稚園という名の示すように、園は緑の木立に包まれたしあわせな環境に位置している。

創立以来、九十余年という学園史をひもとくと、校域の樹木数は、六五〇本を数え、樹種は、樫が大半で、樹齢百年を超えるものが多いと記されている。大学の正門を入るや、スダシイの大樹群が枝を張っている景観に、まず目をみはる。加賀前田藩下屋敷跡——旧陸軍第二兵器廠跡——東京家政大学という系譜からみても、校域がいかに広汎であるかが推測されよう。

冒頭に、園の環境を記したのは、この自然なくしては、私の保育を語ることができないからである。

美しき五月という佐藤春夫の詩を引用するまでもなく、学園の美しい五月は、椎や樫の新葉がほぐれる時の、あの精力的な強い香りの噴出から生まれる。五月の深い空の碧を吸いつくして屹立している樹下に立ち、この香に包まれると、心が萎えている時でも、神泉をふくんだかのように、生への活力が甦ってくるのを覚える。そして美しき五月は弾力となって、子どもたちと共に手足をはずませ、子どもたちと声をあわせて、うたいたくなる。

保育の根源を、この自然との結びつきに求めよう。

幼いひとたちの心に大いなるものとの出会いの機を与えたい。

こう思い定めて二十年余、この間、幼稚園教育要領、教育要領改訂、中教審答申による先導的試行など、疾風のようによぎってゆくのを大樹の蔭によけて、今も、若い保育者と力を合わせて、初志に即した保育を続けている。

入園考査　募集人員が少ないので、応募者は四倍か四・五倍になる。身体検査・面接の方法をとってはいるが、結局は、抽せんだけで合格者を決定している。そのために、家庭も環境も子どもの質も種々雑多。自閉症に近いのも発達遅滞のように思われるのも入り交って入園し、園は現今社会の縮図のようで、それなりに意義ある良い社会構成を成している。

保育の実態　友だちと二人以上であれば保育者に声をかけるだけで、校域の何処へ行っても良いことにしている。女子大生の目が至る処で見守っていてくれるであろう安堵感と、かつて、カスリ傷程度の怪我しかしないという実績とが、自信を確かなものにして、この大胆な許可となったのである。大学の授業の邪魔をした例は皆無である。戸外の自然界に子どもの心を魅するものが多いからであろう。一度だけこんなことがあった。――戸外に向けてドアの開かれている教室を数名の男児が覗き見たのであろう、息をはずませて保育室に戻ってきて、「先生々々、お姉さんたちは勉強していないのもいるよ。机に顔をつけて眠っているのだっているよ」と報告した。

中学、高校から抗議の電話がかかってくることが、ままある。

○池の水をとりにきてうるさい！（池が浅く十五センチメートル位なので、よく氷がはりつめる）

○桜の実を木登りして採っている。あぶない上に、木を傷めて困る。

などの類なので、これらは季節的支障であるので、子どもたちのいたずらは不問にし、ここへは保育者が添付ってゆくことにしている。

講堂の前の三番目の樫の木には、白い蟻がいっぱい集っていて、木がボロボロ粉をだしている。椎の木の下のおだまき草のかげに、かたつむりの赤ちゃんがたくさん生まれた。亀の餌なら、保健室の裏の石を持ち上げると、みみずがいつでもいるよ。小鳥の餌のはこべはここ、兎のための草はこちら。椎の実もスダシイとツブラシイの二種を弁別する能力もいつの間にか獲得している。

子どもたちの発見の早さ、認識の的確さにしばしば驚かされ

る。前述の白蟻の被害の対策を、施設課の方に注進する逆現象の有様になったりする。

年長組になると、広汎なキャンパスのどこかに秘密の場所と称する場所を持つようになる。まだ、私はその場所をつきとめられないでいる。グループにより季節によって、その秘密の箇処が移動してゆくらしいからである。とにかく保育者の知らない自分たちだけの共通のもののあることが、自由感の極致なのであろう。

(二) 迷い

あそんでばかりいては不可ない。それは放任である。巨大な機械化され組織化された現代に生きる子どもたちには、系統だった経験と知的な刺激が必要である。カリキュラムを綿密に立案し実践すべきである。

栗が落ちている。発見し、拾い上げる喜びだけに止めることなく、まだ木に残っているイガのままの栗との相関関係を、子どもに理解できる程度に、認識させるべきである。

焚火は結構、しかし、ただ火にあたっているだけでなく、なぜ火は燃えるのか、どうしたらよく燃えるかなどを、実際の場で、教師は指導すべきである。

右のような理論を度々耳にするのであるが、理路も整い、科学的でもあって、若い保育者はこの考え方に傾斜してしまう。

でも……と私の疑問は頭を持ち上げる。

霜の朝、熊手で落葉や枯枝を掃き集めて、焚火をする。やっと燃えてきた、暖かいわねえ、小さい手をかざし、どの顔も充ち足りた表情になって、炉辺物語よろしく焚火ばなしがはずむ。ああ煙い！　こっちへ来た方がいいよ、そっちに風が吹いているからさ。何だか、燃えなくなってしまったぞ。こうすりゃいいのさ。と、小枝でそっと落葉を持ち上げる。隙間に風が入って、再びパアッと燃えあがる。そうだそうすればいいのだわ、と実行者が二、三人続いて、また火は燃えさかる。

やきいもをしようか。火の下にいもを埋めるより、火の上においた方がよく焼けるよねぇ先生。このようにして陽が高くなる頃まで、焚火を囲んでの保育は、価値のないものだろうか。現代には歯車の噛み合わない経験主義保育にすぎないと評されるものなのか。

科学的とかいう発見も、焚火の燃える過程にあるように思うし、何よりも皆が楽しそうに火を囲んで、日頃は無口な子からも話が出るし、黙っている子がいても、からだが暖められ、芋の焼けるのを待っているうちに、心と心がつながってゆくのを覚える

――巨大な機械文明の中にいるからこそ、原始に近い素朴な姿に還らせたいと願うのは、時代に即さない保育なのであろうか。

木登りと登攀棒の差異に就いて、いつも考えることであるが、二つとも攀じ登る目的は同じであっても、前者の感触は暖かく、後者は冷たい。目的に向っては登攀棒の方が合理的であるが、どうしても行動が直線的になる上に、登り降りの単純なものになり勝ちである。木登りは、攀じ登りかたも多様な上に、登ってゆく心に夢と期待がある。登りつめたところに安定した足がかりがあり、そこが想像と創造の行為が広がる起点になったりする。

マラソンをさせて、子どもの心とからだをきたえる――走るということを目的としたら、鬼ごっことくらべてどうであろうか。〝走れ〟は大人への従属の形となり、鬼ごっこの追いつ追われつは、興味を元とし、子ども同志の心のつながりによって展開してゆく。保育の中では、右に記したような問題にぶつかることが多いのであるが、一番大切なものを育てよう、大切なものとは何だろうと、迷い、手さぐりで行手の道の光りを求めている私の保育の現状である。

(三) 悩み

卒業生の男児が小学校二年生になって、心臓疾患で他界した。二年生になってからは、殆んど病院生活に明け暮れ、十日間ほどであったが、両親の切なる願いで、心臓外科で有名なS教授の病院でもお世話になっていたが手術はせずに帰宅し、別の病院で一か月ばかり治療中に不帰となったようである。

もともと未熟児として生まれ、虚弱のためにすべての発育が不充分で、必要以外の言葉を話さず、顔色は蒼白で、誘いかけなければじっと椅子にかけているといった日常の在園時の状態であった。性質が素直で柔和なので、クラスの子どもたちから疎外されることなく、年長組になった時から、クラスの子どもたちは、このM君の出来ることと出来ないこととを理解するようになり、出来ないことについては暖かい配慮をするようになった。たとえば、昼食はどの席で食べてもよい習慣にしているが、席をとりっくらするのに、M君のためにはいつも席が確保されていた。しかも日当りのよいところとか、ストーブの傍の席とかを選んで。ままごとのお父さん役によくひっぱり出し、自分たちが動きの大きな遊びに移る時には、絵本などを持ってきて、陽溜りに椅子を運びすすめた。

私も、一緒に担任している若い保育者も、M君の弱さが表面に浮立って目立たないようにと、細かく配慮し、身のまわりのことはもちろん、絵を描いたり物をつくったりする時も、特別に手をかけた。月例で行う園外保育には、いつもしっかり手をつないで歩いた。意外と欠席も少く、食欲も普通にあり、〃幼稚園へゆくのを楽しみにしています〃と母親も喜んでいた。小学校への入学期が近づいた時〃ぼく、○○校へ行くの〃とうれしそうに皆の仲間入りをして語っていた。

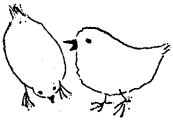
○○小学校の校門をバックに写した、新しい服にランドセル姿のスナップが送られてきた時、若い保育者と二人で、その無事な門出を祝福し合った。

初七日忌がすんで、母親が挨拶に来園した時、「小学校の先生が『こんな児を、幼稚園では気付かずにいたのか』と云われました。学校では、体操ができなくて、体操の時泣くので発見されたのです」

この小学校の先生の言葉に、母親も同感であることが言外に感じられた。心身の発達のおくれを気付いていたればこそ、心を砕き手をつくしたのであったものを。また、クラスの子どもたちのあの暖かい配慮は、死ということでかき消されてしまったのであろうか。私の胸にあふれる言葉はあっても、この涙に沈む母親に何がいえよう。黙して、ただうなだれるばかりである。

私は、ビニールハウス的な役目をしたにすぎないのだろうか。母親には事実を告げ、M君にも、風雪の刺激を与えるべきであったろうか。事実を告げることによって、母親が育児への期待を失い、M君を疎外視しはしないかと怖れた。S教授が「生きても十六、七歳まで」と側近にもらされたという。M君の在園の二年間、友だちと溶け合って生活したこと、子どもたちもまた、M君の内側の世界まで理解したこと、これでよかったのではないかと、私は心のしこりのような残滓を嚙みしめながら自らを慰めている。

（東京家政大学付属みどりヶ丘幼稚園）



私の幼児教育論（二）

清水美智子

一般に知育偏重ということばが吐かれる時、感情・情緒の教育がないがしろにされているという非難がこめられていることが多い。前回の論述で、私は現在は知識偏重の教育が行われていて真の知育は行われていないという見解を述べた。実のところ、この偏りは現在に限らず明治以来の日本の公教育の主流であって、今やそれが幼児のレベルにまでおりてきたという方が正確であろう。明治の文明開化以来、私たちの国はつねに西欧を先進国とみなし、その進んだ文明をとり入れて西欧なみになりたいと願って、ひたすらに新しい知識を輸入して学ぶことに力を注いできた。戦争による屈折はあっても、この姿勢は基本的にはずっと続いている。けれども現在の私たちの国の姿を世界的視野の中で眺めれば、もはや西欧を手本にしそれをまねていけばよい状態にないことは明らかである。第一に西欧近代文明それ自体が大きな曲り角に来ているからであり、また日本はすでに様々の面で西欧型文明の最先端に位置しており、その文明のかかえる問題を解決していくのにお手本のないことが多いからである。これからの私たちの国は、主体的に自らの問題を自覚し自らの途をきりひらいていかねばならないのである。これはすなわち、ひとりひとりの国民が自らの責任で考え行動する、主体的創造的な生き方をしなければならないということである。その意味で、明治以来のこの国の公教育の基本姿勢、知識を教え覚えこませる式の思想を、徹底的に反省し変革していく必要があり、これこそ私たちの国のすべての教育の今日的課題なのではないだろうか。知識の教育ではなく、真の知育が行われなければならないと考える理由がここにある。

前回述べたように、私の考える真の知育とは、思考力を育てていく経験の過程を重視することである。さらにこのような経験の過程は、決して無味乾燥なものでなく、ゆたかな情緒的経験を育くむ過程でもあることに、少しふれておいた。実際、考えるということはたのしいことなのである。ここではこの問題をさらに別の角度からほり下げて、知育・徳育が表裏一体をなしている事実をみよう。わかり易い例から入ろう。

思いやりとはどんな心のはたらきか

誰でも子どもが思いやりのある人間になるようにと願わぬ者はない。どんな立場の、どんな主張を吐く人でも、そういう願いを非科学的だ、時代おくれだと非難する人はなかろう。では、思いやりとはどのような心のはたらきなのだろう。どんなふうにしてそれがよく育つのだろう。思いやりがあるとは、他人の立場に立って考えられることだろう。他人の気持に共感できるこころをもっているということだろう。反対に思いやりのない人とは、他人の立場にわが身をおいてみることのできない人、ものごとをつねに自分の側からしか見ることのできない自己中心的な人だといえよう。現実には自分は自分でしかあり得ないのに、このように自分以外の、時には見もしらぬ他人の立場にもなって考えられるという高等な心の働きを、人間が生まれつきもっている本能だとみなすことはできない。（もちろん、それはどの人間にも内在する可能性としての共感性に根ざしているのであるが）また、「思いやりをもつのはよいことです」「人の立場に立って考えるべきです」といくらことばで教えさとしても、そのことばを反復練習させても、それだけではたとえ思いやりは人のとるべき良い行為の一つだという知識を得ることはできても、その人の内面から自ずとにじみでるような身についた行為としての思いやりにはなり難い。

本能でもなく、単に教えこんだら身につくものでもないとすれば、それはいかにして育ってくるのだろう。成長過程のどのような経験、どのような心の働きと関わっているのだろう。私は次のように考察している。

まず第一に、乳児の時から、日々の生活の中で、自分の気持を敏感にくみとって接してくれる暖かい思いやりのある養育をうける経験を多くもつことによって、快いものとして感覚的に知っていく。親や保育者、先生で代表される子どもに接するおとなの具体的な行動を通して学びとっていく。第二に、成長とともに家庭の内外で、年の近い同胞や仲間とぶつかり合う生活の中で、互いに強く自我を出し合って衝突したり意地悪をしたりされたりする経験（不快な感情）、ゆずってあげたりゆずってもらったり仲良くあそべた経験（快い感情）等をくり返しながら、子ども同志の世界で具体的な人とのつき合い方として、その心を学んでいく。このようにして、自分の経験がゆたかになるに伴い、自分の経験に似た他人の経験への共感性は高まってくるだろう。ただしかし、これだけでは自分の経験できる範囲のことにとどまるだろう。だから第三にこの限界をのりこえて思いやりの心が育つには、自分

の直接経験の域を超える事態をも自由に想定し、そこに自分の身をおきその気持になりきることのできる豊かな想像力を必要とする。自分と直接には何のつながりもない人たちのことにも思いをよせることができ、他人の痛みをわが痛みとし、他人の喜びをわが喜びとして感じとれるには、現実の自分の立場をはなれ現実とはちがった状況にある自分を想像しうる能力、自由に自分をおきかえつくりかえうる柔軟な心のはたらきが必要なのだと私は見ている。

想像力の効用と人間らしさ

このように深い思いやりの心は、豊かな想像力に支えられている。これと反対に、思いやりに乏しい自己中心的な人間とは、現実の自分にしばられ、それとちがう自分を想像することのできない硬い精神の持主だといえよう。想像力ゆたかであることは精神がとき放たれ、柔かく自由である状態をつくり出す。それはすなわち、抽象的思考の能力が育つに必要な条件である。それは現前の事態にのみしばられず、目に見えない世界があることを保証する。直面する状況の中でも、目に見えるものを手がかりにして見えないものを見ることのできる可能性、目に見えない本質を考え未来を見通し得る可能性にもつながっている。もし私たち人間が想像力をもたなかったら、どんな状態で存在することになるだろうか？

目にみえるものだけを信じ、目先きのことだけで判断し、自分のことだけしか考えない状態に陥ってしまうだろう。夢や希望をもつことのない人生になるだろう。内省力をもち得ないことになるだろう。なぜなら、内省とは目に見えない自分の内面（自分の心の動き）をとらえ、反省と展望をもつ抽象的思考だからである。実際、私たち人間は、現実世界において行為する自分とそれを見つめるもう一人の自分とに分化し、両者の拮抗する状態からよりよく自己を生かしていく方向へと、自分を再統合していける可能性をもっている。この自己変革の可能性の実現もまた想像力ゆたかであることに負うている。こうしてみると、人間が人間らしく自由な存在として、心ゆたかに、自律的に生きていく上で、想像力は大切な欠くべからざる精神機能であることがわかる。

想像力の貧しさがうみ出すアンバランス

こんなことを長く述べてきたのは、近年の日本の社会や人間の動き、教育界をふくめた文化状況を私なりに考察していくと、私たち現代の日本人の多くは、想像力が極めて貧しい状態に陥っているのではないかと思われるからである。私たちは、余りにも実

利的に目先の効果を追い求め、目に見えるものに支配されすぎてきたようである。目に見えない心の世界をないがしろにしてきたようである。目に見える世界と見えない世界とのバランスをとりつつ歩むことを忘れてきたようである。現実に適応する方向と現実をつくりかえ未来をつくり出していく方向、この両方向をともに考慮しつつ生きていく努力を怠ってきたようである。人間の問題を外側からとらえる方向に傾きすぎて、内側からとらえていく努力を軽んじてきたようである。自然科学の表面だけに憧れて、主観を排除した純客観主義がありうるような錯覚の下に生きてきたようである。ほんもののすぐれた自然科学者の論文によれば、物理学において純粋客観主義は否定されているにもかかわらず（例えば、渡辺慧「時間と自由」、月刊誌「思想」四十九年八月号参照）多くの論者は、人間の生きている姿として、主観と客観の一体化した状態を認める叡智をもたなかったようである。

このような世界観・人間観のひずみが、人間の生活と成長に直接かかわり合う教育についての考え方に、その活動の実際に極めて顕著にあらわれてくるのは当然であろう。この子どもは今どういう状態にあるか、どんな生活をしているかという子どもの生活実態についての考察や、この子どもは何を求めているか、子どもの内に何が育っているかという子どもの内面への洞察・共感をもとうとせず、それだけの洞察力も感受性ももたないおとなたちが、自分たちの都合のよいように子どもを支配し、おとなの論理で子どもを管理しようとしてきたのが今日の教育の現状であろう。（このように子どもの気持を思いやることの少ない、自己中心的なおとなによって導かれる子どもたちに思いやりの心が育つであろうか？）

子ども自身の世界、子ども自身の心のはたらきを正当にみとめず、成長の原動力は子ども自身の内部にあり、内的な発達への要求（内的衝動とか内発的動機づけといってもよいもの）によって、自らが経験を求めていくという能動的主体的存在であることを忘れて、一方的に外から与える計画を立て、おとなのおもわく通りに支配する方向に傾きすぎている。内的な発達への要求に相呼応した働きかけや環境構成を心がけていくという、調和のとれた教育活動が見失われている。さらにまた、子どもが自らの諸経験をゆっくりと消化し醗酵させていく内面的成長の過程（自らの内にゆるやかなシステムをつくり、またつくりかえていく過程）を信じることができず、今すぐ目に見える効果をあげようと、結果に直結した短絡的な指導に傾きすぎてしまう。それほどでなくても見た目の美しさ、作品の出来栄え、集団としてのまとまり、動きの速さ、反応の速さなど、ともすれば目につきやすいものに

とらわれてしまうのが私たち人間のもつ弱さであるのだが、現代はとくにこっちに傾きすぎて、バランスを欠いている。これはやはり目に見えるものしか信じられない、見えないものを見ることのできないおとなの不安の反映なのだろう。そこに私たちのおとな自身の内的世界の貧しさ、想像力の貧しさを見るおもいがする。私はこのようなおとなに子どもたちを育てたくないのである。現在のおとなの姿、私たち自身の生き方の反省をふまえて、私は、子どもたちがもっと内面的世界をゆたかにもちうる人間に育ってほしいという願いをもっている。内的世界と外の世界との調和のとれた生き方を求めて、つねに自己変革していくことのできる、自律的な人間に育ってほしいという願いをもって、私は幼児の生活と発達を考え直してみることを提案する。それには、人間はどのような過程をたどって成長していくのかを説明する必要があるだろう。

人間の成長発達を過程として理解する

動物学者のポルトマンが「人間は生理的早産である」といったように、非常に未熟な状態で産まれてきた人間の子どもが成人していく過程は大変長期にわたることが、人間という種の一つの特徴である。この長い過程は決して一様な直線的な道ではなく、また無秩序無方向なものでもない。諸々の精神機能を獲得していく過程は、身体的生理的機能とかかわって順序性があるし、また諸々の精神機能を関係づけ支える精神構造の変化としてみれば、いくつかのふしがある。こういうふしを目やすにして便宜的、相対的に発達の段階区分をすることができる。それと同時に、区分された各発達段階は切りはなされて単独に完結している性質のものではなく、機能的にはみな連続している。発達過程の各時期がそれぞれに他の時期とは異なる独自の特質をもつと同時に、その発達期の特質にもっともふさわしい生活経験の充実が、必然的に後の時期の発達を保証していくという関係にある。このように長期にわたる人間の全発達過程を統合的にみすえて発達の本質をとらえようとしたすぐれた心理学者たちの古い業績から、私たちは学ぶところが多い。

シャーロッテ・ビューラーは、人間の発達過程は、自我が主に対象界に向う時期と、主に自己の内面に向う時期とが交替的に生起しつつ統合されていくと考えた。この考えをとり入れて、牛島義友は精神構造の変化していく過程を次のように区分している。

(1)身辺生活時代（〇～三、四歳）　客観的生活
(2)想像生活時代（三、四歳～七、八歳）　主観的生活
(3)知識生活時代（七、八歳～十三、四歳）　客観的生活

(4)精神生活時代（十三、四歳～二五歳）

前期　客観→主観への移行期

中期　主観的生活

後期　主観→客観への移行期

(5)社会生活時代

もちろんここで、各時期の厳密な年令区分に意味があるのでなく、あくまで相対的なものであるが、人間の個体発生の歴史を大きな流れとしてとらえていくときの方向性が示唆されている。私は、各時期の名づけ方に牛島氏のユニークさを感じるし、生きている子どもを熟知されているが故であることを思う。実をいうと、私が牛島氏のこの考え方をはじめて知ったのは二十年前で、大学の二年生の時、大教室で受講したある教授の「教育心理学」の講義の中で、おもしろいなと思い記憶に残っているただ一つのことであった。その後、私はたくさんの子どもたちと交わりをもち発達研究をしてきたが、中でも、現在十五歳と十一歳になる二人の子どもを育ててきた母親としてのたのしい経験は、日々生活を共にし、共に育ちゆく心のふれ合いをもちつづける教育実践であり、長期にわたる人間の発達を内側から考察しうる貴重な経験であった。十年以上つづいている私の日記風の記録をたどりながら想起すると、子どもの興味がどのように育ち、どんな方向に発展していったか、以前に熱中して身についた機能や知識が、以後の生活の展開とどのようにかかわっているか、ある時期には不適応のようにみえるタイプの行動も、長い時間軸を入れてみれば大変意味のあるものだったことなどがうかびあがってくる。それらを通して、目に見えない精神構造（個体内のシステム）の質的転換・再構造化が行なわれていく過程の洞察に迫りうるのが私のたのしみでもある。

こういう経験をもって、私は改めて牛島氏の洞察の深さ、そのとらえ方の的確さを知った。成長していく過程において、子どもの興味の中心が客観的に傾いたり主観的に傾いたりを発展的にくり返しながら、前の時期の生活経験を次々に包括して主観・客観の調和のとれた主客一体化したもののみかたを形成していくのである。なるほどこういう過程を辿って、子どもは目に見える世界と目に見えない世界を自由に交錯させて認識しうる人間に育っていくのだということを、私は静かな感動を伴って実証的に理解することができる。何か人間という生物のもつ不思議な魅力、神秘性をすら感じる。私の感じとっていることを少しよく伝えるために、私の記録資料から一節だけ引用することをお許し願おう。

満十一歳になったばかりの娘との対話（夕食時）

テレビで「長くつ下のピッピ」を視た直後だった。「長くつ下

のピッピ」をはじめとする一連のピッピの物語は、ずっと以前からこの子の愛読書の一つであった。ピッピは主人公の女の子。

娘「テレビのピッピのイメージは、大体わたしのもってたイメージに近いわ。ただね、声があまりかわいらしすぎてイメージに合わないの」

私「本を読んでいてピッピの声のイメージまで持ってたの？」

娘「うん、ピッピのやってること、生活のしかたやら読んで想像してたらね、声だってあまりかわいらしいという感じよりも、もっと強くて元気のいいイメージをもつね。あとのおまわりさんとかマイケルやらいろいろ出て来る人物は、まあピッピのお話の中でつくり出されるイメージに近いわ。前の〝ドリトル先生〟のテレビの時は、まるっきりイメージがちがってたけどね」

私「そんなに自分の持ってたイメージとちがってたら、見ていてもちっともおもしろくないでしょ？」

娘「ううん、そんなこともないよ。クルッと頭をまわしたらいいんだから」　私「頭をまわす？」

娘「うん、私は頭をまわすことができるんよ。私の頭の中にはフクロがあってね、ほかの人がつくったイメージを入れておくフクロとね、自分のイメージをつくって入れておくフクロとがあってね、どっちにでも変えてみることができるの」

私「フーン、おもしろいね。フクロを使い分けるのね。あなたの頭は想像の世界のことを考えるのが好きなのね。毎日のきまったことややるべきこととか、想像の世界とちがうことは余り考えるのもするのも好きじゃないの？」

娘「いいや、大好きよ。それはね、また別のフクロがあるのよ。友だちやらと遊んだりしゃべったりする時のとね、きまったことや勉強やらやるべきことをするときに使う頭とね、別になってるの、想像の世界のことを考えるのとはね」

私「へえー、それならフクロ四つになるの？」

娘「うんそうそう、ちがうフクロが四つもあってね、いやもっと多いかもしれないな。必要な時とかやりたいときには、そっちの方へ頭をまわすの、そのフクロを使うのよ。クルクル頭をまわせるの、便利よ」　私「しあわせね」

娘「それや、頭をまわせない人よりもまわせる人の方が幸せやと思うね。いろいろ別の世界に入れるからね」

……

（一九七五・一〇・八）

私は、子どもたちの成長の可能性をおとなが早くから狭く限定し枠づけてしまうことをもっとも恐れる。人間というこの矛盾にみちた存在、複雑にゆれ動くところをコントロールしながら、この複雑な世界で、自己を生かしていくことのできるこの生命活

動に、ひそかな畏れを感じるからである。心のかじのとり方によって、外の世界の見え方も、もののかんじ方もいろいろに変る可能性があることに、人間の不思議を感じるからである。だから私は、子どもたちが自分で自分の可能性を発見していくことができるように導きたい、自らのうちに人間としての多くの可能性（自己を高めていく可能性もあれば、自己を滅ぼしてしまう可能性もある）を見出して、その中から自分の責任で自分の生きていく道を選びとっていけるように導きたい。それには事実をしっかりみつめる眼（対象認識）と、自分の心の内なる声をきくことのできる耳や、心の動きをよみとることのできる眼（自己意識）を、共に育てていかねばならない。そしてこれは大変むつかしいことなので、だからこそ人間は他の動物とちがって成長するのに大変多くの質のちがった経験をする必要があり、経験を消化していく大変長い時間を必要とするのではないだろうか。ここでも、育ちに必要な「成熟時間」を尊重すべきことがうかびあがってくる。

精神科医のなだ・いなだ氏が、〝現代はおとなのような子どもと子どものようなおとながいっぱいいる〟という意味のことを書いておられるのを読んで同感した憶えがある。子どもが子どもであることの意義、未熟であることの意義を積極的に評価せず、成熟時間を短縮しようとして早くからおとなの論理で子どもを動かし、おとなのみかたを教えこんでいくことによって、結局、身体（外側）は成熟しても、心（内側）は充分に成熟しきらない未熟なおとなになってしまうのだと私は判断している。

想像力の発達を促す最適期は幼児期である

私は、人間の長い成長過程のどの時期もそれぞれに意味があり、等しく尊重されねばならないと信じている。そして、それぞれの時期の心理的特質に即応した指導を中心にすえることが、子どもを最も生々とさせ、自らの発達を全うさせていくことになるのだと信じている。人生のごく最初の時期の子どもたちと一、二年だけつき合うにすぎない幼稚園の先生たちは、自分たちがこやしをやって育てた芽が、どんな過程を経て実るのかを確かめられないゆえの不安がある。だからともすると見ばえを気にし、すぐ目に見える効果を求めるような保育に傾きやすい。けれどもこの不安に耐える努力をするのが教師であり、また人間としての成長である。この不安に耐えていく支えは、子どもとともにすごす日日の経験から、当の子どもから多くを学びとっていこうという意欲から得られるだろう。また人間の成長発達の過程に対する深い理解をもつことからも得られるかもしれない。そんな気持で私はこの文を書いている。

幼児の時代は、くすしくも牛島氏が想像生活時代と名付けられていることに注目したい。日常の具体的な場面での行動がある程度不自由なく出来るようになってきた子どもたちは、その行動の可能性を想像の世界で使いこなし発展させていこうとする。現実と想像が未分化で、自由に行き来できる心の状態を尊重したい。想像力の発達を促す最適期なのである。もちろん、子どもは順応性が高いから、現実の枠組にはめこもうとすればたやすく応じてくるだろう。おとな好みの〝よい子〟にしたてあげることは簡単である。けれどもそれでは心の世界が育つ時がもてない。幼児期は、対象を自分の主観で彩って認識し、自分のイメージで現実をつくりかえることのできる可能性を見出していく時である。イメージをどんどん発展させてあそびの世界に没入できる特権をもっている時期であることを尊重したい。この時期には、この自由な精神活動を充分に開花させ駆使させて、一人一人の子どもの内なる世界を培っていくように導きたい。

ただひとつの正しい解決を探し求める方向へ向う思考活動は、組織的課題として与え易いし、指導による効果もたやすく評価しうる。けれども、想像の世界は本来正答（きまったこたえ）をもたない世界である。想像活動は何かを手がかりにして、そこからいろいろの方向に考えを拡げていくタイプの思考（イメージ的認識）であり、外からの一義的な組織化はむずかしいし、一方的に教えこんで育てていける性質のものではない。第一に精神が自由にとき放たれた雰囲気をつくり出し、第二に興味を刺激し、イメージをひろげていくヒントになるようなことばのかけ方や、素材・教材えらびや経験の機会を、第三に子どもたちの自発的に芽生えてくる活動や興味に即してもりこんでいくことのできる、おとなの存在が必須である。

そのような保育の展開された一例として、次の論文、園の実践的研究をあげることができる。

津守真・堀合文子、　協力遊びの発展と誘導――動物玩具を媒介として――「幼児の教育・原理と研究」二四〇～二五八ページ（フレーベル館、昭和四十五年）

これは昭和二十九年に報告されたものであるが、時代を超えて変らない児童観・保育観が具体的な保育活動の展開の中にあらわれている。二十年以上経った今日の幼児教育界で各園で、保育内容の研究をしていく際に活用されることをおすすめしたい。

いかに物質文明が栄えても、科学技術の進歩が目ざましくても、人間という種のもつ生物学的条件は変らないし、それに規定された心の問題も基本的には変らない。その心と体を育てていく上で大切な問題もまた不変である。（つづく）（大阪教育大学）

「日本幼児保育史」研究余滴（三）

水野浩志

私の日本幼児保育史研究の発端

私が日本幼児保育史を研究しようと思い立ったのは、今から丁度二十五年前、フレーベル死後百年の記念行事として「フレーベル百年祭記念講演会」が神戸の頌栄短期大学で開催されたときのことである。この講演会に広島大学から長田新・荘司雅子両先生が講師としてお出でになり、私も末席をけがして「フレーベルの教育思想と現代教育」と題する処女講演をさせていただいた。この講演会のあとで、両先生と師弟水入らずの座談会をしていたときに、長田先生から「きみ、大阪の愛珠幼稚園は日本の幼稚園教育発達史を探るための宝庫ともいえるところだ。あれほどの歴史的資料を大切にしているところは日本国中に唯一といえる。幸いにきみは大阪に近く、しかも歴史的伝統をもつ頌栄短大で、幼児教育を勉強しようとしているのだから、ぜひ、ひまをつくって愛珠幼稚園の資料をまとめあげてみてはどうか……」とすすめられたのが、私のそもそもの研究の発端となったのである。

そしてその後間もなく東京で、私の結婚媒酌人でもあった倉橋惣三先生を御訪問したとき、倉橋先生からも「私の書いた日本幼稚園史は東京女高師付属幼稚園を中心とした発達史で、もっと広く全国的な一般の幼稚園・保育所の幼児教育発達史を作りたいとかねて思いながらも、資料焼失のためもあって、ついに果たせなかった。愛珠幼稚園にはお茶の水の付属幼稚園にもない貴重な資料がある。そしてまた京阪神地区の幼児教育界をリードし、私の理論の実践者として活躍された望月クニさんも神戸におられることだ。ぜひ彼女の話も聞き、私の果たせなかった夢を実現してほしい」ともったいないような激励の御言葉をいただいた。当時私

は非常な感激と夢と希望にもえて「日本幼児保育発達史の研究を私がやらずして誰がやる」とばかりに意気込んで調査計画を立て、数年にしてまとめ上げるつもりでいた。

しかし現実はきびしく、調査費も全くなく、月給八千円の中から費用を捻出しながら一人でコツコツ資料をまとめ上げるのには荷が重すぎ、大変な根気と忍耐と卓越した弁別力を必要とした。それでも約一年半愛珠幼稚園にひまを作っては通い続け、遅々とした歩みではあったが資料整理を続けていた。ところがたまたま東京に帰らざるを得ない事情ができ、研究を中断したまま昭和二十八年に頌栄短大をやめてしまった。

しかし昭和三十一年、はからずも日本保育学会の共同研究小委員の一人に私も指名され、学会の仕事として、日本幼児保育史をまとめる機会に恵まれたのである。私一人ではとてもまとめることの出来なかった日本幼児保育史が、共同研究委員一同の見事な協力作業の下にこのたび全六巻となって完成を見るに至ったことは、本当に嬉しく、倉橋惣三先生も地下でさぞ喜ばれていることだろうと思っている。

愛珠幼稚園での思い出

私が愛珠幼稚園をはじめて訪問したのは昭和二十六年九月はじめのことである。長田先生や倉橋先生のお言葉もあったため、当時の中村道子園長は、私のために普段使わない和室の貴賓室を毎週一回、早朝から夕刻まで提供して下さり、茶菓・弁当のお世話まで、約一か月半、本当に有難いことだった。資料を見せていただく中に、これは大変なものであり、資料のリストを作るだけでも相当の年月を要するもので、その資料の中から日本幼児保育発達史の中心資料を選り分けることは容易なことではないと、宝の山に入って、はじめは途方にくれてしまった。しかしまずできることからはじめようと最初は単行本一冊一冊をたん念に読みながら、幼児教育に直接関係のあるもの、間接的ながら非常に関係のあるもの、教職教養的なものに分類し、図書カード目録を作成し、その目録の裏に内容のあらましをメモする作業と、幼稚園関係貴重文献のコピーをとる作業を開始した。

倉橋先生の日本幼稚園史に題名だけ明らかで現存せずとか、内容不詳とされているような、関信三著の「幼稚園創立法」とか、林吾一著の「幼稚保育篇」とかの本を発見したときは、胸がワクワクし、全国におそらくこれ一冊しか現存しないのではないかと思うと、夢中でそれを写し取った。最初はみの紙にカーボン紙をはさんで二部ずつきれいに写本をした。一冊家に持ち帰っては、家内にも手伝わせて夜おそくまで写本した。絵などはガラス板の

下に電灯を入れ、きれいに写しとったりした。あの頃の苦しくも楽しかった思い出は今でも忘れられない。昔の人がよく写本して勉強したと聞いたが、その労苦をあの時程身にしみたことはない。現在では電子コピーでいとも簡単に機械が写し取る便利な世の中となったが、昭和二十六年頃では全く考えられず、何日も何時間もかかって、やっとうすっぺらな本一冊の写本ができる状態だった。あの当時写本した関信三訳の「幼稚園記」の手書きの一部は、中村園長にさし上げ、「特に貴重な文献はこのような写本にするなり、写真版にとるなり、いずれにしても現物の写しをつくり保存されるよう」お願いした。おそらく今でも愛珠幼稚園には私の手書きした「幼稚園記」がどこかに保管されていることと思うが、それは当時の研究者の苦心例としていつまでも残しておいてほしいものだと思っている。

愛珠幼稚園には貴重な単行本ばかりではなく、未整理のままのパンフレット・資料等が大きなミカン箱に二つ、山と積まれており、これ等を一つ一つたん念にあたって資料、文献の総目録を作りあげることは、今後の幼児教育発達史の研究のため一大貢献となることを中村園長にお話しすると共に、その資料整理のため専任者を公費で雇えないものか等御相談もした。またこれら貴重な資料を文献も含めて幼児文化財として文化財保護委員会で取りあげてもらうよう何とか働らきかけ、焼失しない為の保管法をこうずることを考えねばならないなど、ずい分勝手なことをズケズケ中村園長に進言したりお願いをしたものだった。

若さと情熱に燃えていたあの当時のことを思い出すと、いろいろ中村園長に御迷惑をかけたことをすまなく思うと同時に感謝の気持で一杯になる。

中村園長がおやめになり、次の津村節津子園長の時に、愛珠幼稚園の文献・資料・教具類が全教職員並に中川啓史氏等の協力の下に見事に整理され印刷出版を見たことはまことに保育界のために喜ぶべきことと思っている。

保育者発掘の思い出

保育界において活躍した人々の生涯とその業績を明らかにすることは、保育史を研究する上に欠くべからざることであるが、この仕事は簡単なようで中々大変な作業であった。非常に活躍した人らしいということは分っても、その人の思想なり、業績なりが明確な資料の中に文字で書き記されていない場合、これをどのように評価すべきか非常に難かしい。現実にはその世界を動かした原動力であるにもかかわらず、文書で書かれたものがないとき、歴史の上では埋もれてしまうことが多い。保育史を書く場合も例

外ではない。文書が散逸してしまって、保育界で相当活躍され、リードした人なのに資料を発見できないままに充分その業績を掘り出し得ないで終ったものもいくつかある。保育史研究の仕事に従事してつくづく思ったことは、たとえめんどうでも各園の創設事情、沿革史はみな作っておくべきであり、保育者の遭遇した苦しみ、悩みはできるだけ記録にとどめておくこと、またひまをみて自叙伝を書いておくことが後世の人に役立つものだということである。

私が担当した保育者の発掘作業で苦労したこと、失敗したこと、嬉しかったことなど思い出すままに次に記してみよう。

まずはじめに苦い思い出として心に残っているのは、倉橋惣三先生に、神戸にいる間に、またお元気な中に是非望月クニ先生にお会いして生証人としてのお話をいろいろ伺うようにといわれ、心にかけていながらもついに機会を失して、いよいよ保育史執筆の話がきまってから、望月クニ先生を神戸のおすまいに訪問したときには、もう先生は御他界されたあとだった。このことはまことに残念で、私の引込思案と仕事ののろさのためで、非常に後悔した。このことは東京保姆伝習所の創設者である石原キク先生についてもいえる。一度学校を御尋ねしてお話を伺い、そのすばらしい御人格と幅広い御活躍の数々に敬服させられたが、先生御自身の書かれたものは何もない。資料といっても皆戦災で焼失してしまったといわれ、次の機会に、ゆっくり口述記録をとりながらでも先生の生涯と業績をまとめさせていただこうと思いながら、現実の仕事に追われぐずぐずしている中に先生は御他界あそばされ、遂に手つかずで終ってしまった。これも本当に心残りのことであった。

大正期に律動遊戯を全国の幼稚園に普及された土川五郎先生については、御遺族はほとんどなく、やっと探しあてた御令息の未亡人も、先生の生まれや御履歴の詳しいことは何も御存じなく、「亡父はそんなに偉い人だったのですか、ちっとも知らなかった……」といわれる始末で、先生の生涯と業績を調べる作業も非常に苦労した。先生がお勤めになられたらしい都内の古い小学校を尋ね歩き、麹町小学校の古い職員録の中に土川五郎先生の履歴書を発見した時は、涙が出る程嬉しかった。何日も貴重な時間を浪費して、やっと土川先生の履歴書一枚を発見したにすぎない。全くこの忙しい時代に愚かなことだと思われるが、考古学者の発掘と同じ発見の喜びを味わったものである。

西村真琴先生については私が広島文理大の学生時代、研究室にフレーベルと子どもたちの遊び戯れている様子をえがいた大きな油絵がかかげられていて、それは西村真琴という、生物学者が長

田先生におくられたものだと聞かされていた。したがって名前は知っていたが、詳しいことは何も知らなかった。また私が勤務した頌栄短期大学に生物学の非常勤講師としてお出でになっており、時々お会いしていたのだけれども、その先生がわが国保育史上特筆すべき多大の貢献をされた方だとは全く知らなかった。いろいろ保育史の調査を進めていく中に先生の業績の数々が明らかになり、何故もっと先生の生前に多くの貴重なお話を伺っておかなかったかと悔やまれたことである。

西村真琴先生の御令息が俳優西村晃氏であることを知り、はじめて映画俳優のお宅を訪問し、いろいろ資料をお借りしてきたが、真琴先生の著作物を読めば読む程、その雄大にして該博な思想・教養の深さに驚嘆した。哲学博士・理学博士であって、文筆家であり、かつ画伯でもあった彼が、最後にゆきついたところは幼児教育の振興ということだった。一切の栄誉と栄職をすてて民間の保育事業の発展のために全力を傾注した西村真琴先生の思想と業績についてはもっと深く調べる必要があると思っている。

不思議な縁

私にとっては日本幼児保育史研究は、不思議な縁によって結ばれているという感じがする。私が小さいときに通った幼稚園は、土川五郎先生が大正十二年に大井町に創設された瑞穂幼稚園で、私はその最初の頃の園児だった。土川五郎氏の創作遊戯・律動遊戯を日比谷公会堂その他でいろいろ披ろうさせられた園児の一人が、保育史上の偉大な人物としてかつての園長の生涯と業績をまとめることになろうとは夢にも思わなかった。

また私が保育史執筆中、たまたま亡父の書斎を整理したところ、父が広島高等師範学校研究科生時代に執筆した「幼稚園研究」という部厚い原稿が見つかった。これは私の父が明治末期に幼児教育に関心を持ち、当時の関係文献を読みあさり、幼稚園無用論に対抗するため、当時の幼稚園の教育効果測定を思いたち、全国的な調査研究を実施し、これを心理学的に詳細に分析評価したものである。この調査結果を含め、幼稚園教育論をまとめ、小西重直教授の校閲の下に出版直前にして渡米したため、原稿のまま箱に納められていたものである。父が幼児教育にこのような関心をよせていたとは全然知らなかった。親不孝のこの身を恥じたのであるが、父の原稿の一部は「大正初期における保育効果の研究」として、日本幼児保育史第三巻に掲載することにした。父の埋もれた研究の一部を公表することを通して、地下の亡父を喜ばすことになったのも不思議な縁といえるだろう。

その他、私の学生時代の〝フレーベル研究〟が機縁で、フレーベ

ル主義保育のメッカといわれる頌栄短期大学に奉職し、エー・エル・ハウ先生の偉大な業績と先生の集められた多くのアメリカの幼児教育文献の宝庫に接する機会に恵まれたことなど……みな不思議な縁となって私の保育史研究に多大の影響を与えてくれたことを心から有難く思うとともに、人間の出会いの大切さと人間の縁の不思議さとをしみじみと感じている。

執筆後の反省

私はこの共同研究において主たる分担領域は保姆養成と保育会ということになったのであるが、この方面については明治期頃のものは多少資料もあり、自信もあったが、大正期以降については皆目見当もつかなかった。暗中模索しながらも手当り次第古い資料をあさっていく中に、いつしか骨組みや全体の見通しが出来、必要資料が発見され、やっとまとめ上げることができたというのがいつわらざるところだった。そして何でこのような領域分担を引受けてしまったのかと後悔することがしばしばだった。しかし研究調査を進めるにつれ、保育界の動向や活躍した人々の業績思想を知り、とてもよい勉強になったと今では感謝の気持で一杯である。

しかしながら分散してしまった資料を集め、重要な事項をもれなく、客観的に評価しつつまとめ上げるということは容易な仕事ではなかった。自分では正しく、客観的資料に基づいてまとめたつもりでも、後で誤りや記載もれを指摘されたところもいくつかある。特に山下俊郎先生から戦後の保育者再教育講座のさきがけとして愛育会主催のものが今一つ抜けていると御指摘を受けたことは非常に痛かった。このことも含めて、今までに客観的に誤りと分ったこと、発見された新事実等々を追補としてできるだけ早い機会にまとめて出したいと思っている。

まだ外にもいろいろ思い出は尽きないが、割り当てられた紙数も尽きたので、共通した苦労話は他にゆずり、これで筆をおこう。

（東京都立立川短期大学）

◇河辺杲先生と◇ 一問一答

保育の計画をたててもその通りいかないことが多いのですが、それをどう考えたらよいでしょうか。

計画というものは、子どもがこわしてくれるといいますか、むしろその子どもの状態によって計画を修正していかなくてはいけないんじゃないかということを最近思っています。

これは実際に私がやっています臨床治療の自閉的傾向の強い子どもの例ですが、ボクシングの時に使うサンドバッグに似せて作った遊具にのぼりついて、自分でゆらゆら揺らしていました。その時に、私も反対側からぶらさがるようにつかまって抱きかかえて子どもと同じように揺れているうちに、子どもがストンと床に敷いたマットの上に落ちてしまったのです。それで私は、立たせようとか、上げようとかいうのではなしに、とにかくその子どもに触れていったわけなんですけれども、その時に、その子どもは手をさし出さないで足を私の前に差し出したもんですから、私はすぐ足を持って引っぱっちゃったんですね。これはもう、自然のなり行きでそうなっちゃったんですが、そうしたら、それをもっとやれと非常に強く要求して参りました。今度は足を持ってその辺を引きずりまわしたんです。それを止めると、自分で寝ころんでしまって、足をあげてもっと引っ張れというわけです。

子どもの心の動きをとらえることによって、計画した通りでなくても、どんどん活動がすすんでゆくのです。ですから相手のその時の衝動なり気持ちを、できるだけ敏感に感じとっていくという動きが、常に治療関係における私の中にあるわけです。

保育の場面でも、計画が具体化されたところで考えてみますと、子どもの動きによって修正していかなければならないことは、たくさんあるんじゃないでしょうか。子どもに対するこちらの出方によって、子どもの受ける受け方がこちらへ感じられ、それによってこちらが動きを変えていくといったような相互作用といいますか、これが教育の中でなかったら、本当の指導と言えないんじゃないでしょうか。

最近臨床の中で特にそういう自閉的な子どもを多く見ていて、結局、彼等はそういう何か相手との関係の中で本当に感じるものを持たなかった子どもじゃないかという

風に感じておりますし、自閉的じゃなくても、最近の子どもっていうのは、そういうかかわりあいが少ないんじゃないかと思います。もっと子どもの心の動きを見ながらの触れ合いの中で、こちら側の動きを修正していく、つまり教師は常に子どもの心の動きにそって教師の計画にみきりをつけることができるという自然な動きが、幼児との教育においてはとても大事だと思っています。

子どもが同じことばかりくりかえすというのは、いったいどういうことなのでしょうか。

どうしても子どもが同じことを繰りかえしていると、「またか」という気持ちが出て来て、口には出さなくても、心のどこかでそう思ってしまいます。そしてできるだけ早い機会に、ちがった経験をさせたいとまで思ってそのような動きをしてしまい、それが指導だと思っている方が多いのではないかと思います。

ある幼稚園で毎日毎日何枚も何枚も「京都タワー」を描いていた子どもがいました。外観としては非常にピッタリの絵を描いているんです。そこの園はたまたま、絵画製作の研究園であったため、そこの先生は相当辛抱していたわけですけれど、私が行った時には、もうたまらなくなって何とか違う表現をさせたいという気持ちが高まっておられたように感じました。もう延々とこれで、我慢ならないという所まで来てその問題を投げかけられたのです。

私はその時そこまで子どもが描くには何かあるんじゃないか、という感じがして話を聞きながら、また現場の作品を前にずっと並べてシリーズ的な作品をみた時に、よくも忍耐づよくここまで繰り返して描いてきたなと、しかし何かそこにはその子どもの訴えようとするものがあるんじゃないか、訴えきれないでいるものがあるんじゃないかということをその時感じたのです。根気よく訴え続けている何かを、私たちがまだ汲まないでいるのではないかということについて話し合いました。

翌日また例によって「先生、紙ちょうだい」といって来たので、「何が描きたい」ときくと、「京都タワー描く」と言います。そこではじめて担任の教師が京都タワーにのぼった時の気持ちをきいてみましたら、「高いところから見下ろしたら、目がまわりそうやった。目まいが起りそうやった」と子どもが言ったそうです。その時には細長い画用紙を縦に使って紡錘形のようなものをグルグルと描いていて、高いところから見おろしたら先が細くなってみえますが、そんな感じの絵を描いたんです。その翌日から全然タワーを描かなくなった。何かこれが自分のとっても言いたかったもの

のようで、その作品を見てそれがようやく描けて満足したのだなあという感じがしました。

私たちは絵を描くとき、話しすぎて、絵で表現しなきゃいけないところまで言葉で言ってしまう。そうするともう絵は描かないですんでしまうという経験をよくしますけれど、それとは逆にこの場合のように、何か言いきれないもの、表現しきれないものを、その子にとっては引き出せたんじゃないかとも思いました。

つい最近もある幼稚園で、みのむしをいっしょうけんめいに探している子どもがいました。園の周囲にある木のみのむしをトコトンすみずみまで探して歩いています。垣根にのぼってとったりしますから危いので、なんとかやめさせて方向転換させたいと、担任の教師がいっしょうけんめいになっていたんです。そこの園長先生は幼児のこうした行動をよく見守っておられ、「もうちょっとやらせてみてはどうだろう私がみてあげるから」というので、みのむしとりを園長先生も子どもについて探したり取ったりされていたそうです。「どれどれここに大きなみの虫がいる、あっあそこにも大きなのがある」と言って手の届く範囲で取っていました。園長先生もある程度やらせたら他の方に気が向いていくだろうという心がどこかにあったわけなんです。するとある日、その子どもたちと一しょに探し歩いていると、ものすごく大きなのが目に入ったので、思わず「わあ、大きいなあ」と言ったら「あれ取って」と言ったので、竹竿のようなもので取ってやりました。すると子どもはまじまじとこの大きなみのむしを見て、「なあ、こんな大きいのは見たことがないねえ」といかにも感激し、また満足したように言うんですね。そしてその翌日からこのみのむしとりはすっかりやめて、またちがう虫を探しはじめたようです。

子ども自らが忍耐強く、くりかえしている中で子どもが求めているのは、そういう内面の感動というもので、私たちは、そこを考えなきゃならない。私たちが、それを充分汲みとったときに、違った方向へ子どもが動いていく。単純に子どもがくりかえしていると、すぐ無駄なことをしていると思って、これを禁止したり、方向転換を急いで強制したりすることはもちろん考えねばなりませんが、ぎりぎりまで待つとか、それを認めて受けとめていくとかいうことだけではなくて、その時その場の子どもの内面に、もっともっと近づいていく努力が私たちの姿勢の中にあるかどうかが問題だと思います。ただ待っていたらよいのだという、そういったテクニックだけではなく、子どもの内面をできるだけ深く理解してその心に近づいくことによって、待つという姿勢ができてくるのだと思います。

あとかたづけは、子どもにとってどういう意味があるのでしょうか。

子どもがあと始末をする時に気をつけてよくその活動を見てみると、「よく遊んだ時にはよくあと始末ができる」とよく言われている。私もその通りだと思います。やはり子どもというのは、自分にとって非常に大事なものというのは、言われなくてもちゃんとあとしまつをしますね。これは明日も続けて使って遊びたいと思えば、使っている道具をどこにしまっておこうか考えます。自分だけがわかるところへ、むしろ他人に使われたくないのでこっそりと部屋のすみっこへしまいこんだり、なにかで見えないようにすることを考えたりしています。明日も使おうとすれば、どこに、どういう風にしておけばよいかということを子どもなりに考えてくれます。その辺にあとかたづけの必然性があるように思います。

しかし、その反面、満足しきった後では、遊具は子どもたちにとっては、ちょうどお腹がふくれた時に目の前におかれた御馳走みたいなもので、一生懸命に遊んで泥んこにしちゃった時などは、そのスコップもバケツも、もういらないものになってしまいます。しかし、そういうように満足し切ってしまって子どもにとってこれは関係ないんだという風になったものについても、私はやはり自分から離れたものへのかかわり方を学ぶ良い機会にもなるのではないかと思うのです。

例えば「先生もやるから、みんなも手伝って」と言って手伝いということをおぼえさせるようにもっていくこともできるでしょうし、「この中のどれであればかたづけるのを手伝ってくれるかな」といって自分のかたづけたいものを選ばせてかたづけることを手伝いやすいようにもっていくこともできます。あとかたづけは生活態度の主要な内容として、なんとかしてやらせていく、それがしつけとして大切だと考えて指導なさっていますが、なにか子どもの心(気持ち)を無視した指導が多いのではないでしょうか。どんなしつけであっても「気持ちよく、たのしく」ということが伴わないと身についていかないだけでなく、社会的な態度も育っていかないようです。

あとかたづけについてもまだまだ考えていかなければならない問題がたくさん残されているように思います。

子どもにとっての価値というものは、一体何だろうかということ。子どもたちが持ちつつある価値というものと、教師が持ってこれは絶対だと考えこんでいる価値というものを、この際もう少し考えてもいい時期に来ているのではないでしょうか。

(大津市教育委員会教育相談室)

(現職研究会での講演後の話し合いより)

★講演

これからの世界と日本の子ども（二）

矢島釣次

日本の経済

次に、教育の問題を含めて、もう少し経済の問題をお話しいたします。

日本の経済のやり方、考え方、特に女性の方の考え方が間違っている、と私は思います。物価が高くなって、生活が苦しくなる、ということは、田中さんのせいでも三木さんのせいでもないんです。石油、食糧、原材料、これらの平均対外依存度というのが九〇％であります。しかし、この平均値というものにはいろいろ数字のいたずらのようなものが出てきますのでご注意いただきたいと思います。それから第一次エネルギー――石油、石炭、天然ガス等――を日本は外国からどれ位入れているかといいますと八七％、西ドイツでは五六％、アメリカは八・七％、けたが違います。しかもこれらの物の値段は、世界の物価に深い関係があります。

一つはロイター指数、一九三一年を一〇〇として、世界の物価に最も影響を与えるであろうと考えられる一七の品目が選ばれているわけです。そしてこれは狂乱物価の前年一九七三年一月に大体七八〇という数字です。それが昨年の一月に一四一六、その後一四四〇、一四六二と上昇し一年間に世界の物価が約倍になったということです。すると、世界の食糧および原材料、石油、これを九割近く輸入している、そして世界の物価が一年間に約二倍の値上りをしているとなると、日本の物価が上がらざるを得ない、これは当然のことです。私の研究室で計算しました結果、昭和四十八年下期から四十九年の六月まで、大体狂乱物価の時にあたりますが、卸売り物価の上昇は三四％といわれていますが三六％上がりました。その内の五八％は海外要因で、われわれの守備範囲

外の問題であります。したがって私たちにできることは、残りの四二%の国内要因をミニマムに、最小限度に押えるということが、インフレに対処する問題になるわけです。ところが世の中の人、全部がいけないのです。〝政府の責任だ、企業が悪い、自由主義経済体制が悪い〟ということで、責任をすりかえてしまったのです。これでは、インフレ問題に対して、本当のことをいってないということです。

日本の経済はどうなっているのか、といいますと、今までは〝低価額体系〟といって、食糧も原材料も石油も、安い値段で好きなだけ買えました。そして、多くの人々が一生懸命働きました。日本にはあまりトップといわれる人はいません。ポップーポップコーンの略、フワーッとして頭の中はからっぽーは、会社の社長でも政治家でも、たくさんいます。しかし、皆がよく働いて経済がどんどん成長しました。GNPがどんどんよくなりました。ふつう英語で Gross National Products=国民総生産といいますが、私は以前草柳さんとの対談で、これはあまりのびすぎるといけない、だから別な読み方の意味になるといいました。〝グーンとノビればパーとなる〟という読み方です。(笑い)

ところが、現在の経済体制というものは、〝真価額体系〟になってきました。すると、四十九年の一月以来、物価は高くなる、食糧も原材料も石油も安い値段で好きなだけ入ってこない、そういう時代になってきました。だんだん、真価額体系に軌道修正を行うということです。昨年の四月から今年の三月までを考えて、本来もっと上がる消費者物価が平均一四・二%、卸売物価は世界一低い、西ドイツよりも低く落ちついたわけです。しかも、この落付きを見せたのは、田中さんがおもにやったことです。田中さんですらできたのです。今年の四月から来年の三月までを考えましても、消費者物価は一〇%～一一%ぐらいでおさまると思います。こうなりますと、インフレ問題というものを日本はほぼ克服できたのだ、と判断しなければいけないのです。しかも、このようにインフレをほぼ克服できたのは、世界中で西ドイツと日本だけです。政策がよかったのではなく、国民皆がよく頑張ったわけです。ですから、むしろこれからは、景気をよくして行く方向に行きませんと、アジアに経済協力をするだけの余ゆうがもてません。物価問題も大事ですが、景気をよくして行くことも大事なのです。そうすることによって、日本の、アジア、世界における、特に日米関係における状態を非常によくしていくことができるようになると思います。

日本の教育

そこで教育問題に戻りまして、私どもが教育ということを、どういう形で考えていったらいいのかということを申し上げます。

教育というものを正面からとりあげる方もありますが、私のように経済学または国際環境論をやっております者から考えますと〝これからはどんどん世界に眼を開いて行ってほしい〟ということが一つの問題点であります。日本は依然として鎖国であります。日本人の物の考え方というものは、したがって鎖国四〇〇年（鎖国時代プラス明治時代一〇〇年）なのです。これからの私たちは世界的な視野から日本を考えて行くという、そういう教育をしないと、日本はいつまでも日本のことだけしか考えない、世界にのびて行くだけの力を本来もちながら日本という狭いからの中にとじこもる、そういう不幸な状態におちいってしまうことになると思います。

それから、教育の問題の根源はどこにあるか、私の個人的な経験を通して考えたことですが、〝いたみを知る〟ということが〝教育〟だと思います。このごろは親が子どもを叱る時に、なぐるということがいいことだとはいいませんが、いたみを与えるということをしません。そこに実は教育の根本的な間違いがあると思います。私ごとですが私には三人娘がおります。そして二番目の娘は今年一番目の娘の学校を受けまして、見事におちました。それで二番目の娘は非常に自分なりに悩み、考えたわけです。そして今までの自分の勉強のやり方というものが甘えで、中途半端であったことに気がついたわけです。とすると、それは教育におけるいたみを、みずから知ったことだと思います。そして、みずからがみずからの手で、みずからの道を選択していくだけの力をそなえて行くことになると思います。ここにこそ教育がもっている非常に重要な問題点があると思います。

三番目に、何から何まで、幼児教育から小中の教育全部を、今の家庭は学校とか幼稚園におしつける、ここに問題点があると思います。家庭には家庭としての役割がある。個人がどういうふうに行動すべきかについて、幼児期は幼児期として中学は中学として、大人になりかけの時期はまたその時期として、それぞれの生き方、ルールというものがあると思います。それを家庭でしっかり教える、しつけるということ、制裁を加えるということもある場合は必要でしょう。そういうことが家庭教育です。学校教育というのは、学校内における集団のルールを守ること、が必要なことだと思います。たとえば小学校では、読み書き、そろばん、修身、これが中心になります。私は学校給食に反対です。自分の子どものお昼の食事を、母親がみずからの手でこしらえてやる、ということで学校でも子どもと家庭とのつながりができるという方

向に向けて行くことが必要だと思うのです。幼稚園ではみんなお弁当を持って行きますね。あれが小学校へ入るとたちきられて、お母さんは手がはぶけていい、子どもを送り出したらテレビの前にいるか、もう一回寝床に入るか（笑い）というような形では、家庭のしつけも何もできないと思います。

私は、十五年間学芸大学というところにつとめております。私の教え子の多くは学校の先生になります。その時に、信州の山から出てきた、ただでさえ武骨な男が一年生の受持ちになって給食をやっていました。なかなかうまくいかないわけです。こんなことをやるのなら子どもたちともっと接触して、魂と魂のふれ合い、対話を通じて先生が子どもの仲間になりきるか、子どもが先生の話を理解しようと努力する、そういう真剣な話し合いの場を作った方がどれほどプラスになるか、と思いました。もう一人の私の教え子が生徒をぶちました、ぶった行為はよくありません。しかし父兄が校長先生に訴えました。そして校長先生と担任と父兄と子どもとで話し合いがもたれました。校長先生はその先生に、両親に対して謝るようにいわれました。その先生は心の中にわだかまるものをもってはいましたが、素直に両親の前に手を使ったことを謝りました。その時なんです、重要なことがおこったのは……。子どもが反抗しました。〝先生のやったことは正しい、ぼくが悪かったんだ、悪いものが制裁をうけるのは多くの友だちとの生活では必要なんだ〟といったのです。私は、これが子どもから親が教えられ、世の中をまるくおさめていこうという、大人のゆがんだ生活の知恵をみじんに砕いた、子どもの抵抗だと思います。そして子どもがそこからいたみを感じて、教育を本当に考えるようになり、学校のよさをしみじみ感じとった。私の教え子である教師も涙を流して、学校の先生は労働者だとか、聖職者だとかいろいろいわれているが、そんな抽象論は無用だ、私たちは、生身の子どもたちを教えることができ、私たち自身も教えてもらえる、こういう幸福は、職業に労働者だとか聖職だとか概念づけをする意味はないのだといっておりました。そして私も、教育というものはどういう意味においてでもいたみを感じ、感じさせる、またはみずからがいたみを感じてそれを克服していくものだと思いました。

学校には学校の教育、家庭には家庭の、社会には社会の教育があるのです。学校は堂々と学校としてなすべきことをすればいいのです。たとえば、幼稚園で子どもは洋服をよごしてはいけない、そんなことで教育ができると私は思わない。子どもは泥遊びが好きなので、子どもが泥遊びを拒否するなら、これはよほど注

意が必要です。子どもは下等な動物だ、動物集団だなどと近ごろの教育評論家の方々がおっしゃる。それを鋳型にはめるところに教育があると。しんこ細工やあの細工ではないのです。無限に、わくなしに夢をひろげて行くのが子どもです。それを大人の知恵で、わくをはめたり手間をはぶこうとするので、泥遊びをしちゃいけないということになります。ニワトリの首をしめるとか、ネコの首をしめるとか、そういうことはいけないことでしつけの限界です。しかし、子どもの夢をのばす遊びのためには、先生や親が無限に協力し、そういう方向への眼をのばしてやるようにすることは、教育だと思います。そして子どもはみずからがまいたものを、みずからかりとっていくのが教育なのです。

ところが最近は、大人のような、こまっちゃくれた子どもができあがっていきます。ここに私は、教育というものに対するゆがみを感じます。家庭からの要求をいちいち聞いて幼稚園で読み書きを教える、それもけっこうですが、泥まみれになって心から笑って遊んでいる、のびのびとした青空のような心を育てることこそ必要です。この青空に汚点をつけるのが大人の作業なのです。

私の家の近所にも子どもがいます。そして虫をとるということが幼稚園でいわれたらしく、付近の森へとりに行きます。友だちより先に行かないととられてしまうというので、だんだん時間が早くなり、最近では四時ごろに家を出て行きます。それで私もその児童館のそばの森へ出て見ました。すると必ず幼稚園の先生が一人、子どもたちがくるころにはいるのです。この、〝見守っている姿〟が教育だと思います。そして、先をこされちゃならないという子どもの競争心、自然に接するという問題、全部がこれも教育だと思います。ですから学校は、あれもこれもと社会や家庭の教育までかついでやるというような考え方は捨てていただきたいと思うのです。それで学校で、絶対にやらなければならない教育はこれなんだ、子どものしつけをキチンとやる、子どもの夢を無限にのばしてやる、集団の中でルールを守れないものにどうして守らせてやるか、集団と共に喜んで行動できる前向きの子どもをこしらえて行く、そして健全な体をきたえてやる、これが学校教育だと思います。そのために先生方が、先に立って一番いやなことをやる、それが先生の役割だと思います。

私も大学で教べんをとっていますが、大学というところで果して教育が行われているかどうかは疑問です。しかし、幼児期の教育がいかに大切かということは、むしろ教育学者よりも、教育にたずさわらない外部の人からの声が非常に強いのです。私は年に一回、経済学の方の関係でアメリカに行きますが、アメリカの教育機関を幼稚園から大学まで全部見て回って感ずることがありま

す。どんな保育園、幼稚園、中学に行っても必ず国旗がありま
す。日本では、国家の祝祭日であっても国旗をあげる家はほとん
どありません。君が代の歌える子どももいない。国に生きていて
自分の祖国、国土を愛し育てる心がなければ、教育はなりたちま
せん。そのためには国の歌、国の旗を大切にすることも、幼児の
時代からの教育において必要なことなのです。それは右翼が日の
丸をかざすので、日の丸、国旗というと、あ、右翼というふうに
誤って判断されますが、実は違うのです。私はプロ野球が好きで
アメリカに行くと見に行きます。すると必ず開始前に国歌の吹奏
があって国旗があがります。日本では国際的なスポーツの試合の
時だけです。君が代を聞くのもこういう時だけです。しかし自民
党であれ共産党であれ、日本人である以上は、国旗、国歌を大事
にするのは当然なのです。

こういうことをまず感じるのですが、先生、ことに幼稚園、保
育所、小学校の先生方が生きがいを感じて、体をはってやってい
い仕事なのだということに、もっと誇りをもっていただきたい。
アメリカでも教育にたずさわるのは非常に女性が多いです。その
先生方と話し合いますと、家庭と両立させながらともかく私には
この道しかない、といわれる先生が非常に多いのです。でもしか
先生（これは永井文相が作った言葉で私は少なからず憤慨してお
りますが）ではなく、まさに、先生という仕事は、多くの他人の
一番大事な人生を決定する土台をこしらえる仕事なのです。その
仕事に悔いはないと思います。土台がしっかりしていなければど
んな高いビルも建ちません。皆さんは誇りをもって、自信をもっ
て全力投球をしていただくのが皆さんのお仕事だと思います。日
本の今後三十年四十年後の国をよくして行くもとは三木さんなど
の政治家に求めるのではなく、皆さま方に私どもが求めるべき問
題だと思います。今、教育をめぐる問題点はたくさんあります。
しかし私どもは〝日本の教育はだめだ〟といっているばかりでは
よくならないと思います。この一見暗やみの中に、私たち一人一
人が小さなローソクをともして行くことことが、三十年、四十年
後の日本を、キチンと基礎の固まった国家に作り上げていくもと
になると思います。暗やみをのろうよりも一本の小さなローソク
をともそうという気持ちで、明日の幼児教育に誇りをもってまい
進していただきたいと思います。と同時に、私は戦争中、日本を
追われ、戦争は負けると知りながら生活をするということが非常
に辛かった。しかしその時私の支えになった和歌があります。そ
れを次に申上げます。

この秋は雨か嵐か知らねども
きょうのつとめの田草とるなり

これは二宮尊徳翁の歌です。私は、お先まっくらで、雨が降り嵐が吹いて、毎日一生懸命つとめていることも、全部だめになってしまうかもしれない、何もやる気がしないという気持ちにとかくおちいり勝ちな昨今です。しかし、ふとよんだ二宮翁の本の中にこの歌がありました。よしんば雨や嵐にあって秋のとり入れがだめになってしまうかもしれない、しかしわれわれ人間は、一日一日、いっときいっときのつとめを完全につくしきるということ、そしてこの積み上げが必ず明日の基礎をきずいていくのだという考えをもたなければならないと感じたわけです。

そして最後にもう一つ、私どものまわりには大変厚い一見こえがたいような壁があります。それに真正面からぶつからなければいけないのです。挫折することもあるでしょう。泣いたりわめいたりして厚い壁を破って行くということ、これが本当の教育の年輪だと思います。根付け作業とはこういうことであって、これをうけた子どもたちは一人々々が年輪をきざみこまれ、先生方も先生としての年輪をきざむことになるのです。この方向によって将来がきまる。これこそ本当の教育なのです。年輪きざみこみという作業は戦いです。時には戦い利あらずして、一歩後退二歩後退ということもあるかもしれません。しかしそれをどのように前向きにうけとめて、次の前進にそなえるかということが大切なのです。そのためには三つのC、challenge 挑戦したものに与えられる数少ない chance そしてそこにあぐらをかかず次なる挑戦のために change する、この三Cが大切です。またこの三Cの実現のためには三つのVが必要です。これは vitality 年齢にかぎらず活力をもつということ、短期中期の vision をもつということ、これは dream と考えて下さってもけっこうです。教育者が夢をなくしたらだめなのです。それからもう一つ、冒険を恐れてはいけない、常に目をあちこちに配って八方美人になろうなどと思ってはいけない venture を恐れてはいけないのです。

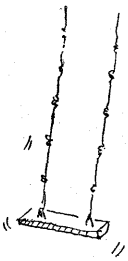
そしてこれは誰でもない、私がするのです。三Cも三Vも、私がこれをもって実行するのです。現場で日々蓄積して行くのだということが日本の教育にとって非常に必要なことだと思います。皆さまの教育のあり方というのは立派に世界で通用いたします。こんないい国はないのです。それは有名人が偉いのではなく、多くの人々が一生懸命自分の職分をつとめているところに今日の日本があるのです。どうか、将来の基礎固めを自信をもってやって下さいますよう心から祈ってこの話を終ります。

（東京工業大学）

（一九七五・七・二四　日本幼稚園協会夏期講習会講演より）

ことばの相談

増井　美代子



はじめに

「カ行の発言ができない」とか「ほとんど意味のあることばが言えない」とか「どもる」とか「声が鼻にかかる」など、ことばの相談に訪れる子どもの問題は様々です。最近、特に「ことばを覚えない」「教えようとしても聞いていないし、こちらの言うことを理解しない」「受け答えができず、コマーシャルなどを一方的にしゃべっている」など、〃人とのやりとり〃の道具としてのことばが身につかなくて困っているという相談をよく受けます。相談を受けているとおのずと「これは一体どういうことなのだろう。この親子にどういうお手伝いができるのだろう」と考えざるを得なくなり、最近の私の関心は、専らこういう子どもたちとの臨床に向けられています。

たくさんの子どもたちに出会っていると、時折、あの子とこの子はよく似ているという想いがすることがあります。もちろん、よくみてみると、やはりどの子も皆それぞれ違っているわけですが、その中の一人、Mちゃんについて書いてみたいと思います。

Mちゃんのこと

Mちゃんは三歳二か月の時「ことばらしいことばはひとつもしゃべらない。おちつきがなく、教えようと思っても聞いていないし覚えない」ということで相談につれてこられました。Mちゃんは男の子で、二つ違いの姉と両親の四人家族です。

一歳一か月で歩き始めるまでは、大きい病気もせず、たいして手のかからない赤ちゃんとして育ったそうです。歩き始めてから二歳頃までは、人見知りが強く、母親への〃あと追い〃がひど

く、泣いてばかりいるので、抱いたまま家事をしなければならないほどだったそうです。二歳のお誕生日を迎える頃には、やらせれば「イナイナイバア」「オツムテンテン」などの〝芸〟をするようになり「Mちゃん」と呼ぶと「ハアイ」と返事もするようになっていたというのですが「パパ」とも「ママ」とも言わないので「ことばが遅いのではないか」と心配になり始めました。二歳三か月頃になると、ミニカーや汽車のおもちゃを並べてひとりで静かに遊ぶことが多くなり、おつかいに行く時もひとりで家においてゆけるほど〝楽な〟子どもになりました。

ことばのことが心配で小児科や児童相談所に行ってみたりしていましたが、たまたま二歳十か月の時、お母さんはテレビの「ことばの治療教室」という番組を見て、そこで言われていること、たとえば「相手をしてやろうと思っても物で遊んでいることが多い」「ひとりで勝手にどこかへ行ってしまうことがある」「人のまねをしない」「指さして知らせることをせず、人の手首をつかんでしてもらおうとする」などのことがMちゃんとあまりよく似ているので驚いて相談を申し込んでこられました。相談の順番を待っていただく三か月の間、「母親への手紙」というパンフレットを送って読んでいただき、家庭でできることを実行していてもらうことにしました。

ことばの遅れ

そのパンフレットに書かれていることについては「言語発達の臨床」、「言語障害児の指導」やテレビの「ことばの治療教室」等をご覧いただけば良いわけですが、要約すると次のようなことです。すなわち「順調に育っている子どもを見ていると、乳児期の母子のやりとりの中ではぐくまれている母親との関係、特に母親に依存してすっかり安心しきっていられる関係が基礎になり、母親を安全基地として自分の世界を広げ日常生活のいろいろなことを身につけてゆく。その中のひとつとしてことばも習得してゆく。だから、ことばを順調に習得しそこねた子どもの場合でも、現在の年齢と関係なく、乳児が受けているのと同質のサービスをたっぷり受け、母親といっしょにいると〝安心〟〝楽しい〟〝母親と同じでありたい〟という気持が育ってくることがまず必要であり、それが保障されれば、好奇心や探索、模倣、学習行動などはひとりでに、子どもの中から湧き出してくる」という考え方です。

出会い

はじめて治療室を訪れた時には、Mちゃんは大きい声でワーワ

ー泣いてお母さんの背中にしがみつくようにおんぶしており、なかなか床におりようとはしませんでした。時間が経つにつれて泣きやんで、やっと床に足をつきました。しかしそれでも、私どもがお母さんのお話を伺っている間ずっと、オドオドした様子でお母さんにピッタリとからだを寄せていました。

パンフレットを読んで、お母さんはお宅でできる限りMちゃんの要求を受け入れて、だっこやふざけっこなど、喜ぶことを捜してたくさん相手をするよう心がけていらっしゃったそうです。そうしているうちに次第に、Mちゃんは、よく泣く子になり、お母さんにベタベタと甘えることが多くなってきたそうです。でも、まだまだ放っておけばひとりで遊んでいることが多く、そういう時には相手になってあげようと思ってもお母さんを無視するかのように逃げてしまうことが多いとのことでした。

Mちゃんの場合、乳児期にどういうわけかあまり手がかからずに済んでしまったために、泣いたり甘えたりしてお母さんを頼りにすることを十分覚えずに過ごし、二歳頃になってから甘えたり、〝芸〟をして人とのやりとりを楽しむようになり始めたのですが、その頃両親がことばの遅れを心配しはじめ、Mちゃんの気持とお母さんたちの気持がうまくかみあわなくなってしまっていたのかもしれないと思われました。そして、お母さんがMちゃんの気持を十分受け入れて相手をするよう心がけ始めたら、Mちゃんの方でも徐々に安心してお母さんを頼ることがふえてきており、面接場面でワーワー泣いてお母さんにしがみついているのも、お母さんの心がけてこられたことのひとつの成果に違いないと思われました。

そこで「Mちゃんを十分安心させること。そのためにはMちゃんの気持をできる限りよくわかってあげて、それに沿うような相手の仕方をすること。喜ぶような相手の仕方を捜して、みつかったらたくさんしてあげること。いやがった時無理してしてあげようと思わないで、やり方を直ちに変えてみること」などを基本方針として、一週間に一回ずつおめにかかり、お母さんといっしょにMちゃんとのつきあい方を捜してゆくことにしました。

それから

当時お母さんの背中におんぶしていることが、Mちゃんにとっては最も安心できる状態であるらしく、最初の一ヵ月間は、治療室へ入るとよくお母さんにおんぶしていました。おんぶしているとだんだん安心してくるのか、おんぶしたまま、まわりの様子をチラリチラリと伺うように見、たまに私たちと目が合うとさっとお母さんの背中に顔をうずめていました。が、回を重ねる毎

に、おんぶしている時間は短くなり、お母さんのとなりにすわって積木を並べたり、ままごとの茶わんを五つも六つも積み重ねて持って歩こうとしたりすることがありました。積み重ねた茶わんがくずれ落ちると、カンシャクを起こさずに何回でも拾っては積んでいました。そんなMちゃんの様子は、それが楽しくてしているとは見うけられませんでした。むしろ慣れない場所に慣れない人といっしょにいる不安感や緊張感を払いのけるためにそれに没頭しようとしているかのように見えました。私たちが声をかけたり、手を出したりしても、それがMちゃんと楽しく遊べるきっかけにはならず、かえってMちゃんを不安がらせてしまうようなので、積極的に働きかけることは控えていました。その頃から、家庭では人の顔をよく見るようになり、興味のあるものをたまに指さしたり、家族の動作やことばをそれらしくまねすることも見られるようになってきていたということでした。

約二か月経った頃、治療室でも、急に人が変わったようにニコニコして、私たちの顔も恥ずかしそうな表情で見るようになりました。でんぐり返しやだっこして回してあげると声をあげて喜ぶようになりました。発声量、知っているものを指さして知らせること、ことばや動作のまね、などが急速にふえ、「ママ」「ブーブ」「ヒコウキ」などのことばもそれらしく言うようになりました。

通いはじめてから三〜四か月め頃は、人にかまってもらうのが楽しくてしかたがないかのようにしきりと指さして知らせ催促するように人の顔を見るようになりましたし、「○○は?」と聞かれるとその物の方を見るなどのことができるようになってきました。治療室では茶わんを積み重ねてもって歩くことは全くしなくなっていましたが、大きな汽車のおもちゃに細々とした人形、ブロックなどのおもちゃをあるだけのせて、ひとつでも落ちるとまたのせて、全部のっていさえすれば安心して別の遊びができるというふうでした。家では、ひとり遊びは全くしなくなり、始終家族が相手をさせられ、少しでも気にいらないとぐずり泣きをするし全く〝手のかかる〟子になったということでした。

四か月め頃、たまたま治療室でいっしょになったRくんとその妹のYちゃんと、その後はいっしょに臨床をすることにしました。この頃、治療室ではカエルの人形を三びきもって歩くことに凝っており、持っていさえすれば安心するのかいつも持ったままRくんやYちゃんのしていることをチラチラと見ながら、お母さんや私たちを相手にままごとをしたりRくんたちのまねをしておりました。「オンブ」「マンマ」など、要求する時にもことばを使うようになり、お母さんにもむやみにベタベタ甘えることは少な

くなりました。

その後約三か月間は治療室へ入るとカエルの人形を離さず、遊びの内容も、ふとんに乗ってハンモックのようにゆすってもらう、鏡にサインペンでらくがきをする、Rくんたちのそばにすわってままごとのようなことをする、何となく室内をウロウロ歩きまわる、などのことが大部分で、特別めざましい変化はみられませんでした。その頃の記録に「お母さんがとても疲れている感じで気になる。次回はRくんといっしょにしないでMちゃん母子だけで、ゆったりおちついた雰囲気でやってみた方がいいかも」と書いてあります。そして次回は、この親子だけで臨床をしました。

七か目め頃には、バス停でRくんの姿をみつけるとニコニコして近寄ったり、「Rくん」とつぶやくように名前を呼んだりするようになりました。カエルの人形もすっかり忘れたように手にしなくなり、八か月め頃には六十語ぐらいのことばを言うようになり、十か月経った現在では「プール・ハイロ」「アシ・ノセテ」など、たどたどしい調子ではあっても、二語つなげてしゃべることもしばしばあります。

先日、お母さんは「おもしろいくらい人の言うことばをすぐまねて言うようになり、ずいぶんおしゃべりになりました。その点ではあまり心配なくなったのですが、家の中にいると服を脱ぎたがり、寒いのに裸でいることと、おちつきがなく、いたずらが激しいので困ってしまいます」とおっしゃっていました。

茶わんを積み重ねて持って歩くこと、汽車に細かいおもちゃをつめること、カエルの人形を必ず三びき離さないで持ち歩くことなどもそうでしたが、その時どうしてそうするのかと理由を考えてもよくわからないのですが、一方で子どもを安心させ、守り、喜ばせていさえすれば、いつの間にか〝忘れるように〟変わってくることが多いので、今お母さんが困っておられることもそんな経過をとるのだろうかと思っているところです。

思うこと

田口先生が日ごろおっしゃっていることを、毎日、たくさんの子どもやお母さんと出会いながら、「あ、本当だ!!」「やっぱり!」「なるほど、こういうことだったのか」と、出会って始めてわからせてもらえる体験を始終しています。

たとえば、子どもの不安を除き安心させることは、本当に大事だと思います。安心していなければ、じっと見たり聞いたり、変化を楽しんだりする余裕がないわけですから、いくら教えよう、見せよう、聞かせようとしても、まわりで起こっているそういう

ことに気づくはずがないからです。話しかけても無視しているようにひとりで勝手におもちゃを並べていたTくんの場合も、けだるそうにへやのすみでゴロンとねころんでばかりいたSちゃんの場合も、何とかして喜んでもらえることを捜したいと思って、いきなり声をかけたりだっこをしたりすると、するりとぬけるように別の場所に移っておもちゃを並べたり、ねころんだりしていました。TくんやSちゃんをじっと見つめたり、声をかけたり、手をさしのべたりするのをやめて、お母さんのお話を伺っていると、一時間近く経ってから自分からお母さんと私の話しているそばに寄ってきて、それでも子どもには働きかけずにお母さんと話し続けていると、そばにすわってひざにもたれかかってきました。そうやって仲よくなってしまったあとは、ふざけるようにあやしてもよく笑いますし、だっこされることも好きになりました。いろいろな声を出しながら走るようにへやの中を行ったり来たりしていたNちゃんの場合もそうでした。TくんやSちゃんやNちゃんには「安心させるためには、ただやたらに働きかけてもだめ。十分にこちらを観察させる余裕を与えることが大事。十分観察してだいじょうぶそうな相手だとわかれば、そこで自然に楽しいやりとりは生まれてくることが多い」ということを教えられました。

こちらが「こういうことをしてくれるといいな」と期待して、いろいろなことをしてみせている時には、なかなかそれに注意を払ってくれないし、まねもしないのに、私自身が楽しんで夢中で何かしている時にヒョイとそれをまねられてびっくりすることがよくあります。「してほしい」「してくれるかな?」という期待の気持や、ためすような気持は、こちらが考えている以上に敏感に感じとられてしまいます。誰とつきあう時でも、自分に素直な気持でいることが大切なのだとハッとさせられました。

赤ちゃんとお母さんのやりとりを見ていると、赤ちゃんが泣くとすぐに、お母さんはしていた事を途中でやめても、おせわをしたりあやしたりしています。この〝タイミングよく〟応ずるということが、その人を頼り信頼する（やがてはその人自身に興味を持ち、みようみまねでまねて、ことばも覚える）関係ができるのにはとても大切な事だということもたくさんの子どもとお母さんから教わりました。朝、目がさめた時すぐにお気に入りのことをしてあげると、その日一日親子共に調子よくすごせることが多いとか、何かしてほしがった時にすぐに応じてあげるとほんの少ししてあげただけでも満足するのに、こちらの用事を済ませてからと思って待たせると、あとになっていくらたくさんしてあげても満足できないらしく喜ばないので、お母さんもどうして良いのか

わからなくなってしまうなどということです。

「そんなに子どものいうなりになっていたら、わがままな子に育ち、しつけもできないのではありませんか」とおっしゃるお母さんもたくさんいます。乳児が受けているようなサービスを十分受け、お母さんを頼り安全基地にするようになれば、お母さんの気持を察することができるようになり、しつけもできてくるのだということは、実際に親子の関係がそうなってきた時にはよくわかってもらえるのですが、心配になっている時に実行してもらうのはなかなかむずかしいことのようです。先のことを思って不安がらないで「子どもを十分受け入れて安心させ、こわがらせたりいやがらせないように」という方針にケチケチしないで徹しきってもらうためには、お母さん自身が安心できなければなりません。今している私たちの仕事の大部分は、お母さん自身が安心し喜べるようお手伝いをすることなのかもしれないと思っています。子ども、お母さん、臨床家が、お互いに安心させあい喜ばせあうことができている時に、はじめて良い臨床ができているのだろうと思います。

私は今、大学病院の中で、ことばの相談を受けていますが、安心して信頼し喜びあえる先輩や仲間を得ていることをたいへん幸せに思います。

最近強く感じていることのいくつかを書き並べましたが、もしかしたら、これはもう十年も前から聞かされていたことかもしれないと思いつつ、学生時代に受けた講義のノートを見返しています。

（聖マリアンナ医科大学）

参考資料

一、田口恒夫編　「言語発達の臨床」光生館・一九七四　（「母親への手紙」は、この本の一八八―一九八ページ）

二、田口恒夫編　「言語障害児の指導」全国言語障害児をもつ親の会発行

――ことばの遅れた子の育て方――一九七五

――話せない子・質問と答――一九七五

――話せない子・質問と答第二集――一九七五

三、NHK教育テレビ「ことばの治療教室」毎月第二週、ことばの発達の遅れシリーズ

注、Mちゃんとの臨床は、治療室のスタッフである中台憲子、神礼子さんといっしょに行なっているものです。

私の幼児教育論 XV

神沢良輔

三　保育の基本（十三）
――幼児とのかかわりあいの中で――

(XVI)　明るく、美しく安定した心で幼児に接する

ひとりひとりの幼児は保育者に愛情を受容してもらいたいという要求や、自分のもっている価値を認めてもらいたいという要求をもっている。それは、どのような場所においてもかわらない。また、幼児はこのような要求を保育者が必ず受容してくれるものだと思っている。

だから保育者は、このような幼児の要求を常に満足させてあげられるように、明るく、美しく安定した心でひとりひとりの幼児に接することを心がけることがたいせつである。

とはいっても、保育者とても人間であり、いつも安定した状態で保育に臨めるとは限らないし、気分の悪いときだってあるであろう。でも、つとめて明るく、美しく安定した心で幼児に接することのできるように努力すべきである。

いうまでもなく、保育者の感情の不安定さは幼児たちにもすぐ影響を与え、幼児たちの行動を不安定にしてしまうだろうし、このような状態では、保育をするということ、そのこと自体が不可能になってしまうということにもなろう。

すくなくとも、明るく、美しく安定した心で幼児に接していこうとする保育者の努力は、幼児が安定した姿で活動しているということで、保育者としては最大の満足をうることができるだろうし、そういう努力によって、自己の感情を制御できたという自信は、幼児とのかかわりあいの中で、さらに自己の感情の安定を求めていくということになっていくのではないだろうか。

保育とは、このような幼児とのかかわりあいの中で、保育者自

身が自己をより高い水準へ変革していくことの努力の中にあるのではないかと思うのである。つまり、保育者が、自己を安定させていこうとする努力の中で、幼児も安定していくということになるといっても過言ではないだろう。そこに、幼児とかかわっている保育者の真の姿があるのではなかろうか。

このようなひたむきな保育者の姿は、たとえ保育の過程の中でいろいろな失敗があったとしても、幼児にも美しいものとして受け入れられるだろうし、その中で、保育者も幼児とともに発達していくことになろう。

(XVII) 美しいみだしなみで幼児と接する

前述のような保育者の努力に対しては、幼児は美しいものを感じるであろうし、また、自分の担任の保育者は、美しくあってほしいと願っているであろう。

それは、保育者の年齢的に若いということや、いわゆるオシャレであるということでは決してない。きちんとしたみだしなみ、人間的なやさしさ、幼児といっしょになって力いっぱい元気にとびまわれる健康さ、そういうパーソナリティのすべてに美しさを感じているということである。

だから保育者の服装についても、幼児は、非活動的なものや、どっちみち幼児といっしょにいれば汚されてしまうからという理由で、うすよごれた作業衣のような服装や、暗い色のものについては、決して歓迎しないであろう。

「うちの先生、おしゃればかりしていて、ぼくらとちっとも遊んでくれへん」とか、

「先生、ちょっとおしゃれした方がええわ」

とかいうようなことを、私も幼児同士が話し合っているのを聞いたこともある。

また爪を長くのばしたり、爪に濃厚な色のマニキュアを塗ったりして保育するということは、一方は幼児に危険を与えることにもなりかねないし、他方は、幼児に保育者とのかかわりにおいて不自然さからくる不安感をもたせることになりかねないということになろう。

つまり、保育者は健康的な美しさが要求されるだろうし、それはそのクラスの雰囲気や幼児の活動にも微妙に反映していることは事実である。

このようにみてくると、保育者のみだしなみは、やはり、幼児とのかかわりあいの中において占める位置は決して少なくないと思われるのである。

(XVIII) 保育者の手は、幼児とのかかわりあいのためにたいせつである

保育者の手をみていると、なにか保育者の保育に対する構えがわかるように思う。ある保育者の手は、幼児たちがすがりついていたり、幼児のからだにふれていたり、また幼児のために用意してあげたものを運んだりというように、いつもふさがっていて、きわめて忙しそうである。

でも中には、手もちぶさたで、手をだらんとしていたり、坐っているときには、手をあごにあてたり、幼児の間を動くときにも、手をうしろに組んでゆっくりとコーナーを監視的にながめて歩いたりしている保育者をみかけることもある。このような保育者には不思議に幼児の方も無関心で、保育者に積極的に働きかけているという姿がみうけられない。

そのため、このような保育者の学級は、なんとなく活気がなく、幼児とのかかわりあいもうまくいっていない場合が多いし、保育者の態度も拒否的にみえる場合すらある。

やはり、保育者の手は、保育者の目と同様に、幼児とのかかわりあいの中で、もっともたいせつなものだということがいえるし、そのためには、保育者の手は、幼児のどのような動きにも対処できる必要がある。もちろん、手の動きのひとつひとつを意識していては保育はできないであろう。でも、手をうしろに組んでいては保育にならないことだけは事実である。

だから、〃保育者の手は、幼児とのかかわりあいのためにたいせつである〃ということを再確認しておくことは必要である。

＊＊＊＊＊

〃私の幼児教育論〃ということで書き始めて、いつの間にか、二年が経過してしまった。そのことは、私が幼児との生活から離れて二年経過したということにもなる。私にとって、幼児とともにいた思い出は、美しく楽しいものとして残しておきたいと願いながら、その時に感じていたことをまとめたのが本稿であり、それなりの意味があると思うのである。そのため、〃幼児とのかかわりあいの中〃にみられる〃保育の基本〃という現場の中心的な問題のいくつかをまずあげてみることにした。これはまた、私の保育実践における反省ということでもある。

いうまでもなく、ここにのべたこと以外にも、幼児教育にはまだ多くの問題が山積していよう。このことについても述べなけれ

ばならないことは多いが、〃保育の基本〃についての一応のまとまりができたようにも思われるので、このあたりで、〃私の幼児教育論〃をひとまず終ることにしたい。

なお、参考までに、〃保育の基本〃について、これまでのべてきた項目についてあげてみると以下のようである。

(1) 幼児とともに生活する。
(2) 幼児の一日の生活は朝の一瞬できまる。
(3) 幼児の目の高さで接する。
(4) 幼児の行動の是認・否認は、まず保育者の目（視線）で。
(5) ひとりひとりの幼児のことばの中にある感情を受容する。
(6) ひとりひとりの幼児は、いつも保育者と話し合っていると思っていることを理解する。
(7) 必要なときに必要なところに動けるよう、余裕をもって幼児の活動をみつめる。
(8) 幼児を集合させるときは、保育者が先にその場所に行く。
(9) 必要なときには十分な指示をする。
(10) 保育者はすべての幼児たちの活動のみられる位置にいる。
(11) 幼児が〃そそう〃したときこそ、幼児とのかかわりをもつチャンスである。
(12) 幼児のひとつひとつの行動には、それぞれの意味があることを理解する。
(13) 幼児のせいにして、自分の保育の自己満足をしない。
(14) 幼児を先入観をもってみない。
(15) ひとりひとりの幼児が保育の内容を選択できるようにしてあげる。
(16) 明るく、美しく安定した心で幼児に接する。
(17) 美しいみだしなみで幼児に接する。
(18) 保育者の手は、幼児とのかかわりあいのためにたいせつである。

（暁学園短期大学）

人でつづる保育史

中川花代先生をお訪ねして

赤間峰子

前回の白石トク先生につづいて、荻窪幼稚園の中川花代先生をお訪ねして、やはりどこか一本筋の通った大先輩のお話に、私はまたもや〝かぶとをぬぐ〟というよりも羨望に似た気持ちでいっぱいになりました。私はいつものことながら心の準備もせずに伺いましたのに、先生はまことに快く次から次と、楽しそうにお話をきかせて下さいました。

まず私は保育者の道をお選びになったそもそものところからお話しいただきたいと申し上げました。

先生は山口県のお生まれで、来年は八十歳におなりの由ですが、とてもそんなお年には見えません。その昔、女学校を卒業後、型通りの花嫁修業がどうしてもいやで上の学校に入りたいとお父様にお願いになったそうです。先生は内心、広島女学院（いまの聖和の前身）を望んでおられたのですが、上の学校はもちろん〝ヤソの学校など〟となかなかお許しが出なかったそうです。そんな時にご親戚に〝あんなお家柄のいい方がヤソに……〟と尊されたほどの小母さまがおられて、その方のお口ぞえでついに先生は念願の広島女学院保母師範科に入学なさったのだそうです。それだけの熱意をもって入られただけに、〝ただもう楽しくて……〟と心から楽しそうにその学校時代のことを話されるのです。

校主の西村精一郎先生とおっしゃる慶応義塾とコロムビア大学ご出身の先生は、教育学、教育史、心理学等、思想的なことを教えて下さいました。そして中でも特にフレーベルの思想やら生い立ちは私を感激させました。思えば、これが私に幼稚園の先生になりたいという決心をさせたといってもいいのではないでしょうか……。ところがこの先生は、校主でいらして事務の方もいろいろご多忙でとかく休講が多い。それで私は少々ほかの生徒よりも年が上であったこともあり、若かったのですね。〝まだこれだけ教科書におならいしていないところが残っているのはおかしい〟と冬休みに補講を願う抗議を行いました。そしてもちろん、この

先生はこれを承知して下さったのです。

このほか、真鍋由郎という博物の先生もなかなかの人格者でいい先生でした。近くの河原でいろいろな物を採集したりして、実物を使っての授業、わざわざお魚を煮ていらしてその骨を数えさせたり、かえるの解ぼうをさせたり、顕微鏡を使って未知の世界をのぞく等、ためになりかつ楽しいものでした。殊に〝桜の花が散ったあとを見てごらん、すぐにもう来年の花のつぼみができていて来年の用意ができている〟とおっしゃったことなど、今でもはっきり覚えています。マクドエル先生とおっしゃる外人の先生の音楽リズムの時間には、レコードに合わせてひとりひとり自由表現を行わせるなど、当時としては非常に新しいやり方だったと思います。

でも、とも角楽しくて、同級の二十人ぐらいは全部が喜んでそれぞれ就職して任地に向かいました。私は故里に近い岩国に新しくできた教会附属の幼稚園につとめることになりました。この幼稚園は教会の牧師館を改造して新しく作るということで、それこそ机、いす、手洗い場、トイレにいたるまで、一応幼児教育の専門家は私だけでしたので、すべて私が任されました。そして日曜学校に手伝いにいらしていたお嬢さんを助手に、とも角私の保育者としての第一歩がふみ出されたわけです。幼児は二、三十人でしたでしょうか。しかし家庭の事情やら何やらで、私は一年でこをやめて神戸へ参りまして、結婚いたしました。

その辺のことをちょっと申しますと、私の父のことをお話しませんとおわかりにならないと思います。父は、私が広島へ入ります時に大変反対したような人ですが、一方自分もやはりいなかの生活にあきたりなかったようです。もともと動植物の好きな人で(学校は高等工業、今の東京工大を出たのですが) トマト、アスパラガスといった、当時いなかでは青くさいといって見向きもされなかったものの栽培から、あひるを飼い、ふ卵器を備え、ついには牛まで飼ったという人でした。そして日本国内の農業ではだ

めだ、とフィリピンのミンダナオ島に渡りました。そして排日感情の激しかった現地で土地も手に入らず、結局はたくさんのお金を使っただけで帰国しました。そんな父に、やはり私はひかれていたのでしょう、岩国の幼稚園をやめて、その時は父のいるミンダナオに行くつもりだったのです。

しかし当時は関西学院の先生をしておりました主人と婚約いたしまして、このミンダナオ行きは実現いたしませんでした。そして婚約中に主人は熱心な伝道者であった兄を失い、そのあとをつぐべく牧師になる決心をして私に打ち明けてくれました。私はもちろん学生時代にクリスチャンになっておりましたし、賛成し、結婚いたしました。昔のことで、私の出ました女学校などでは、日曜日に教会へ行ったというだけで校長からヒドク叱られるというような時代でしたが、私はそのころから村の集会所へこられた有名な方のお話などうかがって、ひそかにキリスト教への憧れをもっておりました。そして広島に入りましてクリスチャンになりましたので、牧師になった主人に従って東京へ参りました。

それでも私は幼稚園の先生になりたいという夢は捨てていませんでしたので、結婚の時にも将来、できれば自分で幼稚園をやりたいということを条件にいたしました。そして最初にまいりましたのは代々木にありました千駄ヶ谷教会でした。見ますと教会の裏にあき地があるのです。私はここを幼稚園にしたいと思ったのですが、信者の方たちの反対にあってそれは叶いませんでした。その後、関東大震災の後に新しい家を求めてここ荻窪にまいりまして、この土地を借りて家をたてたのです。坪二銭か三銭、うそのようなお話です。そして念願の幼稚園を始めましたのが大正十五年ですから、この幼稚園は昭和と共に歩んできたわけです。

最初はもちろん認可も何もありません。五、六人から始めました。ただ後援して下さった方は、佐藤瑞彦先生、赤井米吉先生等々ご立派な方ばかりでした。佐藤先生は〝無料の子どもを入れなさい、お金を出して来るようないい家の子どもばかりではいけない。精神の強いたくましい子を入れなさい〟とおっしゃって下さったことが印象に残っています。

(ここで私が、〝その無料のお子さんというのをお入れになったのですか？〟と口をはさみますと)

初めはみんな無料でしたよ。お金なんていただけません。きてくれて、楽しく遊んで……それでよかったのです。でもまあその状態はそう、いつまでつづいたでしょうか、その内にまあお金をいただくようになって……でも苦しいことは苦しいでした。税金が払えなく困ったこともあります。でもそんな時、いつもどなたか助けて下さったのです。そして開園当時はこの中だけでなし

に、中央線の線路のそばの林で遊んだり、井の頭公園、浜田山あたり、浴風園という老人ホームのあたりまで草をつんだりして歩いて、帰りは電車で帰るなど、それはそれは楽しい毎日でした。

それから粘土細工をずい分いたしましたよ。今のようなくさいのでなく、本当の粘土、あれはようございました。今でも私は本当に自然を大事にしています。幼稚園を始めました時に植えた桜が大きく枝をはって、今年はその赤い葉がとても見事で、子どもたちがその葉を細長い画用紙につけてインディアンごっこをしているのを見ますと、ああ長かったのだなあと、五十年という月日をしみじみと感じます。今はよい後継者を得ましたので、私はこのへやから子どもたちの声をきいたり、姿を見たりしながら本を読んだり書き物をしております。そして毎週土曜日に子どもたちにイエスさまのお話をすることにしております。神さまの大きな愛とか、奇跡とかを、どうしたら子どもにわかるように話せるか、これが私の一週間の宿題なのです。

障子の向うは園庭、という小さなお茶室で先生は静かに、終始ほほえみながら話して下さいました。とても初対面とは思えないのは、私の母とちょうど同じぐらいのお年で未亡人となられたとうかがったからでしょうか、そして私の家にすぐ近い神楽坂にはお知合いがいらして、よくお出かけになったとか。お茶やお菓子をお運び下さった原田シヅ子先生はお茶の水の現職研究会へご熱心にご出席とかで、〃もうすっかり安心〃と先生も心からおうれしそうでした。もっといろいろうかがいたい気持ちをあとにお庭で写真をとらせていただいて失礼いたしました。先生は途中までお送り下さって、見えなくなるまで高く高く手をふっていて下さいました。私はお話の途中で〃失礼ですけど、先生はわり合に楽天家の方でいらっしゃいましょう?〃とまことに失礼なことを申し上げてしまいました。いろいろなご苦労のことを、あまりにサラッとお話しになるのでつい単純にそう申し上げてしまったのです。でも私は帰りながら、いや、とんでもないことを申し上げてしまった。先生のは楽天家と申上げるより、物事にクヨクヨしないで未来に向って常に前進なさる方なのだ、としみじみ思いました。ご自身でも、〃もしこんな世の中になって、幼稚園がつぶれてしまうのなら、それもそれでいいと思っているのですよ〃とニコニコしながらおっしゃったのです。お若いころ、勉強なさるのが楽しくて楽しくてたまらなかったとおっしゃる先生、そしてどんな苦難も来るなら来いとサラリとおっしゃる先生、私はやはりここに中川花代先生の真価を見たと、まことにおこがましいのですが、つくづく思いました。（一九七五・一一・一七）

結ぶ

寺井美奈子

ここに赤と白の二本の紐があるとする。これを結ぶためには、「俺は赤だ」「俺は白だ」とつっぱっていては結ぶことができない。結ぶための何センチかの部分で、赤は白を受けとめ、白は赤を受けとめて、はじめて蝶結びなり花結びなりができあがる。

人と人との結びつきをつくっていく場合でも、お互いがまず相手を受けとめるだけの余裕のないところには、つっぱり合いがあるだけである。〈結ぶ〉ということの前提には、まず相手をありのままで受けとめるということが、どうしても必要になってくる。「わからない子だ」「悪い子だ」「こまっちゃくれた子だ」などと頭から決めつけてしまうのが一番いけない。決めつけてしまうのは、おとながつっぱっているのであり、子どものほうにもそれなりの言い分があり、それがうまく表現できないために、つっぱってしまうのである。そうした子どもにたいして、おとなまでがつっぱってしまえば、もはや〈結ぶ〉ことなどできるわけもない。自閉症、または自閉症ぎみの子どもが増えつつあるのも、つっぱっているおとなが増えているあおりなのであり、子どもは恐ろしいほどに、周囲のおとなの心理状態までも受け継いでしまう。そしてそのことが、その子の性格をつくっていくのである。

子どもは子どもなりに、たとえどんなことであれ、自分のできることをしたいという欲求をもっている。ひとつの状況のなかで、自分のやれることは何なのか、ということを見ており、それをすることによって、人間の仲間に加わりたいという気持は本源的なものである。ときにはそれが見当違いのことはあるけれど、仲間入りしたい気持に変りはない。

弟の小さい子どもが来るたびに、母が急いで仏壇をしめていたのだが、四歳になるころから時々忘れると、やってくる早々、自分で仏壇をしめはじめた。かの女にとって、仏壇はしめるもの、であり、それをしていないのを見ると、その役をはたそうとするのである。そのとき、かの女のすることを禁ずることは簡単だが、その行為をまず受けとめて、一緒にしめることで仏具が決してオモチャではないこともおぼえてきた。何しろ仏壇のなかには子どもの好奇心をさそうオモチャになりそうなものが沢山ある。しかし、それはおばあちゃんの大事なものであり、それぞれの人の大事なものは、勝手に持ち出してはいけないことを、少しずつ理解できるようになった。いまでは開いていれば、「しめないの」

と聞くようになり、「今日は開けておきましょう」と答えることで、納得するようになってきた。

もし最初に「いたずらするんじゃありません」と頭から叱ったならば、そこでおばあちゃんとの結びつきはできなかったろう。もちろんそれだけが二人の結びつきのすべてではない。しかし、そうすることによってひとつの〈結び〉ができたのである。これはあくまで一例であり、いろいろな状況のなかで、具体的にいくつもの〈結び〉をつくっていくことによって、おばあちゃんと孫のあいだに人と人との結びつきがつくられていく。

人と人との〈結び〉は、ひとつひとつの具体的な事例の積みかさねをすることによってできていくものであり、いくらおばあちゃんが孫を可愛いと思っても、まず相手を受けとめる、という態度なしには、いつまでたってもおばあちゃんの片思いに終ってしまう。わたし自身、病気で寝ていたため、何ひとつしてもらうことのなかった父方の祖母が好きだったのは、ほとんど小言がなかったためである。その反対に二言目には小言がとんできた母方の祖母は最後まで馴染めなかった。

おとなが子どもを受けとめていくということは、何でも「いいよ」「いいよ」と言うなりに、子どもの欲求を通してやることではない。何にも知らぬ白紙状態で生まれてくる子どもには、ひとつひとつ教えて教育していかなければならない。しかし、その教えるというおとなそのものを子どもが好きにならない限り、何かをおぼえるということ以前に、おとなそのものを拒否して、つっぱねてしまうのである。そのため、最初にまずおとなが子どもをありのままに受けとめ〈結び〉をつくることが必要であり、教育というのは、それからはじまる。

（評論家）

むすぶ

中本愛子

編集部から「むすぶ」というテーマを頂いた時、ふと以前経験した一つの事を思い出しましたので、感じたままを記してみたいと思います。

ある時、年長児男女数名とビーズでくびかざりとか、うでわ、ゆびわなどを作ったことがありました。絹針に糸を通し最後に結びをつくるところ迄は私が――、あとは子どもたちが自由に好みの長さにビーズを通し、両はしを結んで出来上りです。

中でもA君は妹に作ってあげるんだとはり切って、たんねんに

一つ一つ選んでずい分かかって、やっと二センチばかり通し、うれしそうに勢いよく糸のはし迄引いたのはよかったのですが、その途端ビーズはむざんにもバラバラに散ってしまいました。恐らく結んだつもりで忘れていたのか、あるいは結び玉が小さすぎたのか……とにかく私のミスでした。あの時のA君の残念そうな顔を今でも忘れることができません。

ぬいものをする時、うっかり結び目を忘れ、かなり針をはこんでから、スーッとぬける時のくやしさ――、こんな経験は度々あったのに……ましてA君は妹のために、と一つ一つきれいな色をえらんで一生懸命通したものだけに、どんなにかくやしかった事でしょう。糸のはしを「むすぶ」という動作は簡単ですけれど、つい忘れたり、また小さすぎては今迄の苦労は無駄になってしまいます。またこのビーズを通す場合、最後の「むすび」は実はここから次の新しい動作につながる、いわば出発点なのでした。

しっかりした、しかも適当な「むすび」がなければ、次の新しい動作はたのしく、スムーズにつながらないのだと考えさせられました。しかしこの大切な「むすび」も糸の途中にあったのでは邪魔にこそなれ決して受け入れられるものではありません。「先生、これ何とかしてよ」ともってこられ、昔母が教えてくれたおまじないを、ブツブツとなえながらといた事もありました。やはり「むすび」は適当な場所に、適当な大きさであってこそ意味があるのだと思いました。

「むすぶ」という意味を辞書でひいてみましたら「糸などを結ぶ」とか「交わり」とか、「終り」「実を結ぶ」「しめくくり」などでした。保育者にとって「むすぶ」とは一体どういうことでしょう。たしかに「しめくくり」ということはいえます。いろいろな意味で――。でも私はこの一つの経験から、教師とこども、こども同志の「交わり」ではないかと思います。一年という一本の糸の中で私はどのようにこどもたちと交わり、つなぎ合ってきたのか、また糸の途中で大きな「むすび」(障害)をつくり、一人一人のこどもを十分受け入れられなかったり、或時は「むすび」を忘れ、気がついて結び直した時には、すでにこどもたちは、しかも大勢のこどもたちはぬけてしまっていたり……。とかく私の「むすび」はこのようなもので、いつも反省しております。

一年という長いようで、短かい糸は、間もなく終ろうとしています。せっかくつなぎ合ったこどもたちも、バラバラになろうとしています。でも私はその前に、たとえわずかの間でも、始めと終りの糸をしっかりと結び合わせ、この輪の中で教師もこどもたちも、また父母も、共に喜び合える仲間でありたいと思っております。

(さぶらん幼稚園)

人と人をむすぶ

片岡霊恵

今年度最終号のテーマとうかがったので、はじめは「むすぶ」という言葉の意味を、結末とだけ考えていましたが、あとで「むすぶ」には、もっと違う意味や使い方があることに気づきました。自動詞としては「露をむすぶ」とか、他動詞としては、「つなぎあわせる」「約束する」など。また名詞としての「むすび」は、リボンむすび、蝶むすびのように、糸や布に関連していますが、「おむすび」という調理法にも使われています。アツアツのご飯に梅干いりのおむすびの魅力、帯をむすんだ和服の美しさ、ネクタイやネッカチーフのアクセント効果を考えても、結ぶことによって、何か新しい創造があるようです。

多田道太郎氏が「しぐさの日本文化」[注1]の最終章「むすぶ」のなかで、「紐と紐をむすび、米粒をむすび、手と手をむすぶという作業をしてゆくうちに、心と心のつながりをつくってゆく」といっておられますが、人と人をむすぶものは一体何でしょうか。日頃、私は保育内容「社会」の研究演習で、かなり多くの時間を、人間関係や集団形成の問題についやし、若い人たちと考えあっているので、このテーマを、人と人をむすぶ視点から再考してみたいと思います。

保育の場では、まず先生と子どもを「むすぶ」ことが考えられます。先生と一人一人の子どもとの間に、それぞれのつながり―関係がつくられなければなりません。津守、本田、松井氏らは、よい保育者と子どもは、まるで「見えない糸」でつながっているようだと表現しておられます。[注2] すばらしい比喩だなと感心していました時、次のような学生のレポートに出あい、新しい発見をしました。

A子（三歳）は一人で壁ぎわに坐り、ブロックをほとんど全部自分のまわりに集め、その外側を大きな積木でかこんで、誰も中に入れないようにしている。K（三歳男）は、別の所でブロック遊びをしていたが、飛行機に使う細長い形のブロックが全くない。そこでKはだまってA子のところに行き、周りの積木をおしのけて中に入り、ブロックを乱暴につかみ出した。A子は「あかん、勝手にとったら！」と大声で言いながら、ブロックを集めよ

うとしている。

私（実習生）はそばに近寄り、まずKに「Kちゃん、だまってもっていったらだめよ。貸してほしい時は何ていうんだったかな？」と言ってみた。Kは少しはずかしそうにして「かして」と小声でいった。「そうね、貸してほしい時はそういうのよ」と私。A子に対しては、「Aちゃん、そんなに沢山あるんだから、Kちゃんにも貸してあげてよ。皆で使って皆で遊びましょうね」というと、A子は、案外すなおに「うん」といって、私にブロックを少しさし出した。私はそれをKにわたした。

（平安女学院短大二年　牛田美子）

この指導は、表面的には成功であり、AとKは、けんかせずそれぞれ満足したのですが、彼女は、次のように考察しています。

「この時、私は、先生という立場にある者が子どもの中に入る方法について考えた。私はAとKの接触が、あとあとまでうまくいくきっかけをつくってあげたつもりなのだが、結果的には、Aと私、私とKとのつながりが出来ただけで、AとKの間には、別によい関係がなかったし、結ばれなかったような気がする」

この考察は、短大二年学生にしては、深くするどいと思われますし、クラスで討議してみたいと思っていますが、私の考えをまとめてみましょう。

「見えない糸」を拝借させていただきますと、A児とK児との間の糸は、先生というむすび目でつながっているといえないでしょうか。はじめは結び目は目立っていますが、段々に、小さくなりわからなくなるでしょう。そしてやがて、二人は、先生の介入や仲介なしで友だちになってゆくと考えられます。このように、保育―ことに集団保育の場では、先生と子どものつながりと同じ位大切なことに、子ども同志の関係があります。私たちはこれを百も承知なのですが、ともすれば、見落すことが多いのではないでしょうか。しかし、いつも、大人が子ども同志を結びつける役目を果さなければならないとは限りません。この場合でも、ほうっておけば、AとKはけんかをするでしょうが、そのあとで二人がブロックを分けあうことや、一緒に遊ぶことを考え出したなら、二人の間は、結び目なしの糸でむすばれるのです。

人と人がむすばれるということは、すばらしい創造的な〝わざ〟であると思います。私のすきな祈りの一節に「われらに、うるわしき徳の衣をまとわせ、愛の帯をもってむすび」とありますが、私たちの人間関係が、愛によって結ばれることを心から願うこの頃です。

注1、多田道太郎著「しぐさの日本文化」筑摩書房
注2、津守真、本田和子、松井とし共著「人間現象としての保育研究」I　光生館

（平安女子短期大学）

むすぶ
――そのもどかしさ――

早川満寿子

大勢の子どもたちが、足どりも軽く登園して来ます。その中にたまに一人位、ひものついた靴を履いて来る子どもがいます。きちんとひもが結んであって軽そうなその運動靴は、脱ぐ時はいいのですが、帰りに履く時が大変です。ひもをほどく、下の布を引っぱる。両方のひもをぎゅっと持つ。早くお友だちと帰りたいのになかなか結べない。結んだつもりでも手を離すと左右がばらばらになる。なかなか結べない「もどかしさ」を教師も共有する。教師の手を借りてやっと結んでもらう。ああよかった。思わずにこにこする。けれどもこのひも靴は、足元がしまって歩きやすいのです。

我が家の二年生になる息子が、秋の運動会には走りやすいひも靴をどうしても履くといいはり、とうとう買わされました。よし、これで頑張るぞと、当日迄、それを履いて通学しました。玄関で身をかがめて左右のひもをきゅっと引っぱり、いつの間に出来る様になったのかきちんと結んでいます。私もこの子が小さかった頃、一足のひも靴を求めたことがありました。しかし、普通の運動靴なら自分で履けるのに、ひも靴の時は親が必ず手を貸さねば駄目で、もうひも靴は買うまいと思ったことでした。でも子どもはその靴を履きたがりました。歩きやすかったのか、それとも履く時に親がちょっと手を触れて履かせてくれるのがうれしかったのか――でも今は、さっさと一人でひもを結んで学校へと飛び出して行ってしまうようになりました。

幼稚園の庭では、まぶしい陽をあびながら先生がまわしてくれる長い縄を、歌に合わせて飛んでいます。〝大波小波でぐるりとまわって猫の目〟歌の後も一、二、三、四……といつ終るかと思われる程、長く長く飛んでいる子ども。〝大波小!!〟で縄が足にかかり、終ってしまう子ども。次々と順に飛んではまた列の後につながって、男の子も女の子も今度こそはと順番を待って飛び続

けています。最後迄長く飛び続けようとする子ども自身の決意とは反対に、一つ二つ位で足に縄がかかってうまくとべないもどかしさを、子どもたちは全身で受け止めながらまた次のチャンスをじっと待っています。

縄を持つ保育者の手にも力がこもります。こちらでは、一人飛びをしているグループがあります。両足でリズムを刻んで飛び続ける子ども、走りながら飛んでいる子ども、〝おじょうさん、おはいんなさい〟〝ありがとう〟と二人で身を寄せ合って飛んでいる子どももいます。S子とY子は、五歳になった年少児です。仲良しだが対立する事もよくあります。縄とびの得意なY子は、〝幾つ飛べるか競走しよう〟とS子と飛び始める。何回やってもY子の方が長く飛べてしまうのです。Y子は喜々として縄をまわし続け、S子は思う様にならない縄をしっかり持って、何回もやり直して飛び続けていました。しばらくしてから庭にいるY子とS子を見ると、今後は鉄棒の所で遊んでいます。ここではS子がY子に〝あなた逆上り出来る？〟〝よく出来ないけど〟〝じゃ、鉄棒の上に座れる？〟〝出来ない……〟身軽にくるりと鉄棒をまわってしまうS子。鉄棒は握っているけど、体が思うように動かないY子。手ばなしで鉄棒に腰掛け、得意そうに足をぶらぶらさせているS子には、縄とびの時に見せたあの悲しそうな横顔は嘘のようです。友だちの出来る事を見て、〝すごいな〟と思い、自分もやれたらいいな、いや出来るぞ、やってみよう、と意欲が湧き勇気を出して挑戦してみる。子どもの世界にはこうした動きが小刻みに繰り返され、なかなか達成出来ないもどかしさの中にも、受けたり与えたりし合いながら、一つ一つ身についていくのだと、しみじみ思うのです。教師というものは、ほんのわずかだけ腰をかがめ、靴のひもを引っぱる事位しかして上げられないようなものだけれども、これから先のいつか、子どもたちはしっかりと自分の手で靴のひもを結べる時が来るように、いろいろなことが身につき、達成して行くのだということを、強く信じたいのです。

教育とは、教師の側ではなかなか手ごたえを確かめられないもの、結べないもどかしいもののように思います。三月のこの時、保育者として今迄やって来た事は本当にもどかしい事で、絶対的な確かさなど何にも評価する事が出来ませんが、子どもたちと一生懸命共に過して来たことで、いつの日にかきっと子どもたちの中で結ばれるのだという期待を持ち、子どもたちの背に祈りと声援を送りつつ、新しい歩みへと送り出したいと思っているのです。

（翠ヶ丘幼稚園）

〝結ぶ〟ということ

笹沢園子

あるひとつの保育体験をもとに、〝結ぶ〟ということを考えていきたいと思う。

〈事例：S子に於けるひも結びの意味〉

一―㈠　五歳児のクラス（二学期）のこと。大型積木を使って、クラスのほとんどの子が参加して、基地作りの活動。S子（五歳六か月女）も参加。

一―㈡　基地はほぼ完成し、屋根を作ろうとの声があがる。ある子の発想（プラスチック製の脱衣カゴの網目にひもを通して結びあわせ、それを連ねていってひとつの大きい屋根にする）により、屋根作りの作業開始。

一―㈢　S子は、この作業が自分にとって困難すぎることを見てとり、他の子にさんざん八つ当りして、その場を逃げ出す。

一―㈣　保育者は、「困難でも逃げ出さず、自分なりに努力してほしい」と思い、半ば強制的に、ひもを結ばせ屋根を作らせる。

一―㈤　S子にとって、やはり、この作業は困難だったらしく、泣き泣き試行錯誤を繰り返していたが、ひもを口にくわえたりしながらも（これも、考察するとおもしろいが、今回は割愛する）、どうにか、ひもが結べるようになる。

一―㈥　これ以後も、毎日のように、クラス全体の動きとして、ひも結びが遊びの中に入ってくる。

さて、このひも結びの活動と前後して、S子の生活に、次のような変化が見られた。

二―㈠　S子は絵が好きな子で、これまでも度々、自分の部屋からクレヨンと自由画帳をもって来て、他の子が遊んでいるホールの傍で描画することがあった。

二―㈡　その時、早く描きたいとあわてて、へやから走り出るため、クレヨンを床に落して散乱させてしまうこともあり、そういう時には、いくら落ち着かせようとしても、ただ泣きわ

めくばかりであった。

二―㈢　ところが、このひも結びの時期と前後して、たとえ、クレヨンが床に散乱してしまっても、まずクレヨンを拾ってから、ホールへ急いで走っていくようになったのである。

〈考察：保育に於けるイメージの探究〉

この事例から、幾つかのことが考えられる。まず、一と二は、本当につながりのあることなのかどうか。偶然、同じ時期に、一や二のある意味でS子にとって目立つ活動が出てきたのではないか。この問題を解決するためには、同じ時期の事例を数多くあげて検討する必要があろう。

また仮に一と二が関係のある事なら、どういう関係があるのだろうか。心理的発達に於て、S子が一でも二でも、〃困難なことに立ち向えるようになった〃ということだろうか。この解釈も一理あり、S子の他の場面での活動と総合して考えれば、よりはっきりしてくると思われる。

しかしながら、この事例に於ては上記の見方とは少し異った見方をしてみることもできると思う。その見方は、〃保育に於けるイメージの探究〃という立場からのものである。〃保育に於けるイメージの探究〃とは、今、ここに起きている事がら（保育場面での）を、既存の自分の枠組（心理学や保育学の知識だとか、しつけなどの価値観を含んだもの……等々）を全てとり払い、事象そのものを見ていく中で、その事実の中にある本質（意味）をとらえていくことである。そのためになされるべきことは、まず、事実をそのままとらえること、その事実を見ている自分に生起したイメージ（評価でない）をとらえて、そのイメージを発展させること、その事柄にまつわる歴史的知恵（洋の東西を問わず、歴史的にイメージ化されて来たもの）を参考にすること……等々である。

この事例については、たとえば、結ぶということを自分で実際にやってみて、どのような感じをもつかとか、結ぶという作業をみていると自分は何を思い起こすかということを整理したり、また、結ぶという言葉の語源から人類普遍のイメージについて考えていったりするのである。

これらの作業を通して、我々は、そこに生起している事柄の、表面的、一面的でない、真の内面的意味を理解するのである。

ここで先の事例にもどって、とりとめもなく想いを巡らすことによって、結ぶということの意味を探ってみよう。

どういう時に、〃結ぶ〃という言葉が用いられ、それがどうい

う意味をもつものなのか。たとえば、人と人とが結ばれるという言い方をする。条約を結ぶとも言う。その他諸々。これらの事から、一般に〝結ぶ〟ということを考えていくと、そこに、ある共通したものが見えてくる。ある二つのもの（根元ではひとつになっているかもしれないが、少なくとも見えるところでは別々で独自のもの）が出会い、その出会いのところで、ひとつのものとして、その別個であることを克服していくところの活動である。人と人との結ばれに於ては、別個な人格AとBとが、その結び目（たとえば愛情）を中心として、AとBの調和した新しい世界を作っていくし、条約の結びに於ては、別個の国であるAとBが、ある協定という結び目によって、新しいAB両国の関係（たとえば友好関係）を作っていく。

また、別の方面へ想いを巡らせてみると、たとえば、日本文化を代表する風呂敷や着物など、もともと、外側と包まれる内側が別個に存在していても、ひとたび〝結ぶ〟という行為が入ると、その両者は、機能の面でも、格調の面でも、全く新しい世界を作る。よく、着物を着る人が、「最後に帯をしっかりしめる（結ぶ）と、気持がシャンとする」という言い方をする。結ぶことから、あたかも新しい人間に生まれ変わったかのようだ。

また慶弔の時使う〝水引〟というのがある。吉事には赤・白・金、凶事には、白・黒などを使う。これは、赤は赤、白は白、黒は黒で独自に意味を持ちつつ、その結び方で、慶弔様々の意を作る。

以上のように、別々の存在であることをそれぞれ保ちつつ、〝結ぶ〟というひとつの出会いに於いて、新しい世界を展開していく活動……として、この〝結ぶ〟ことの意味を考えてみるのもおもしろいと思う。

さて、前記のような想いを持ちつつ、この事例について更に考えてみよう。S子にとって、この〝結ぶ〟ということは、どのような意味をもっていたのか。これを考えるに当って、もう一度目に留めたいのは、一―㈢作業の難しさを知ったS子が、他の子に八ツ当りしてからその場を逃避すること。二―㈡早く描画したいのに、クレヨンをこぼし泣きわめくこと。これら二場面で共通していることは、二つの別個の力（矛盾した力とも言えよう）の前で葛藤しているS子の姿である。前者では、基地作りはしたいができない。後者では、早く描きたいが拾ってからでないと描けないし、拾っていると遅くなる。しかし、S子は、〝結ぶ〟という活動と前後して、この矛盾に対する葛藤を解決し、それを乗り越え、自分を制御統一していく方向に踏み出したのである。つま

り、泣き泣きでもひもを結んで屋根を作ったり（一―㈤）、クレヨンをまず拾ってから、大急ぎで絵を描きに走っていく（二―㈢）ということができるようになってきたのである。

ここでは、S子に於て、先程一般的事柄に於てイマジネーションを働かせ想いを巡らせたのと同じこと、つまり、別個の力を、〃結ぶ〃という点で統一し、新しい自己の世界を作り出していったことが、推測されるだろう。

保育に於て、〃イメージ〃をとらえていくということで、以上に見て来たように、ひとりの子どもの活動の過程を通して、子どもと共に、子どもの世界を経験することが可能となり、また、そのこと自体、大人が既存の枠にとらわれない新しい生活へ入っていく糸口となるのである。

（お茶の水女子大学　大学院）

結ぶ

――出発と終息の十字路――

本田和子

古い時代に、女たちは、愛する人を送るとき、その着衣の紐を心をこめて結んだ。彼女らは、「結ぶ」ことによって、離れていく人の上に何を祈ったのであろうか。「結ぶ」とは、「封じ込める、保つ」という意を持っている。肉体に紐を固く結ぶことは、霊魂を内に保つ行為であった。愛する人の霊をその体に封じ込め、健やかな旅を願ったのでもあろうか。そしてまた、再会するその日まで、肉体も魂も変ることなく、という女の想いも込められていたことだろう。結ばれた紐は、結んだ女が解くべきものとされていたという。

各地から出土する縄文の土器、とりわけ瓶のような器の上部に、紐が巻きつけられしっかりと結ばれたものが見出される。また、同じ出土品の石棒の頭部にも、藤つるの皮などが巻かれ、固

い結び目を見せていたりする。

「結ぶ」ことの呪術、すなわち、それによって霊力を生まれさせ、或いは保とうとする呪的行為は、人の歴史の遥か彼方に、その起源を持つということになろうか。

＊　＊　＊

一本の紐は、結び合わせると輪になる。輪は、内と外を区切って、その中に閉じられた空間を作り出す。輪の内側は、外界から遮断され、内密の空間として特別な意味を帯び始める。「結ぶ」という話が、「占有する」という意味でもあるのは、このゆえかもしれない。

人と人は、結ばれることによって、お互いを占有し合うのだろうか。自己の内部が他者によって占められ、他者の内側もまたこの自分が充たしていると感じるなら、自と他の区別は自ずから不明となろう。倉橋惣三は、「わが子との真の結合を体験して、われの子どもか、子どものわれか」と驚嘆した。そこには、自分でも他人でもない、新しい何ものかが生まれている。そのとき、人は、主客二分の対立的なありようから逃れて、幸せな一体化へと飛翔することが可能となる。

「結び」の語源は、「陰陽相対的なものが和合して新しい活動を起こす」とある。「結び」とは、「はじまり」なのである。

私どもが、開花の始まりを「蕾を結ぶ」ということばで、また、家庭の出発を「男女が結ばれる」という形でとらえるのは、そのあかしであろうか。

然しながら、同時にそれは、一つのことがらの終焉をも意味している。新しく生まれるために、人は、一度び死なねばならない。「結び」とは、「始まり」と「終り」の十字路なのだ。

私どもは、ものごとの最終部分を、「結び」ということばでまとめる。和服を身につける場合も、帯を結び終えることで着こなしが完成される。一すじの布の「結び」が、その仕上げに位置づくのである。

＊　＊　＊

三月、子どもたちとの生活の「結び」の季節。それは、一連の時間の「終り」であり、同時に新しい時の「始まり」でもある。

一人々々の子どもとの間に張られた「見えない糸」を、ここでもう一度、心をこめて「結び直す」ことを試みよう。

古代人たちのように、子らの旅立ちの幸を祈って。そして、いま結ばれたその糸は、離れていくお互いを、不可分の新しい関係に生きさせるものとなるのである。

（お茶の水女子大学）

数年前に経験したことであるが、幼稚園を卒業間近のころに、数人の子どもたちが、砂場で石を削って半日過していたことがあった。コンクリートのかけらを石板の上でこすると、石の粉ができる。長い時間かかって、皿の上にわずかばかりの粉がたまると、水を少し加えてこねて、他の子どもに手渡す。それを薬だと云っている。少しでも泥がはいると惜しげもなく捨てて、また長い時間かかって石を削る。その熱心に石を削る姿に私は思わずひきつけられて、半日を過した。薬というのは、子どもにとっては、病気を治したり、長生きさせたりする魔力をもつものであろう。それは、固い石を、忍耐強く、しかも激しい熱気をもってこすりつける作業を長時間続けることによって作り出される力でもある。

見方によっては、ただ、石を削って半日を過すとは、卒業間近の幼稚園児にはふさわしい活動ではないという批判があるだろう。二、三年間の教育のしめくくりの時期、間もなく小学校の入学の時期には、もっと別の活動がなければならぬという論者もあろう。けれども、私はそこにいて、子どもの活気のある息吹、ほんのわずかの石の粉を作り出した満足感を見て、これはまさにむすびにふさわしい活動であると思った。別の子どもはもっと違った形の遊びをするだろう。それぞれに、最も充実した遊びをすることができるのが幼稚園の三学期である。いそがしく追いまわされない、ゆっくりした幼稚園生活がほしい。その中からはじめて、新しい次の生活が生まれるだろう。

（津守）

幼児の教育　第七十五巻第三号

三月号　© 定価二〇〇円

昭和五十一年二月二十五日印刷
昭和五十一年三月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製品不良品がございましたら，おとりかえいたします。

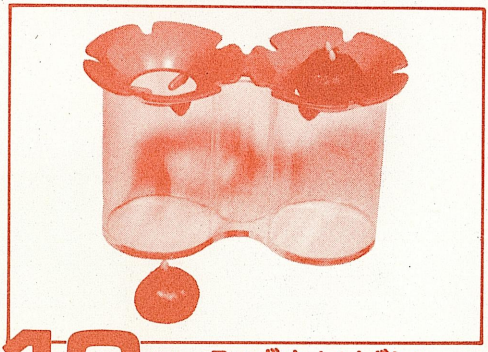
▶新発売◀

明日の時代を担う幼児におくる〝科学する心〟を育てる教材です。

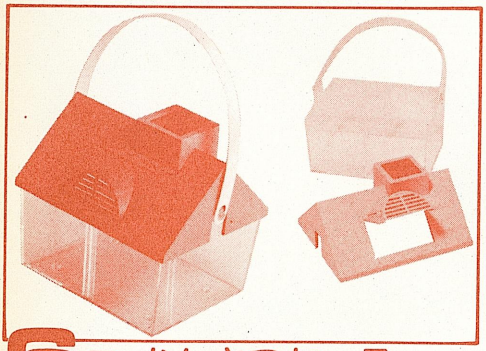
キンダー科学教材シリーズ

年間6セット 1,200円

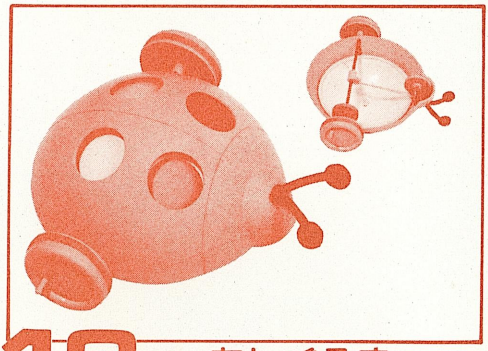
4月 さいばいセット
（アサガオ・ハツカダイコン）



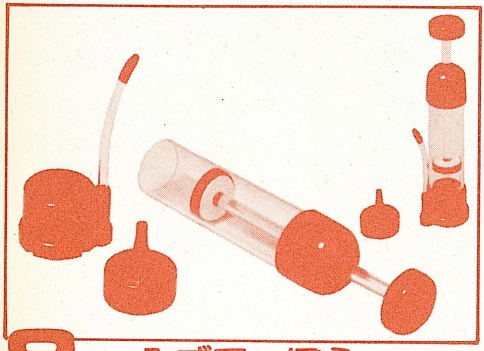
10月 みずさいばい
（クロッカス・2連式）



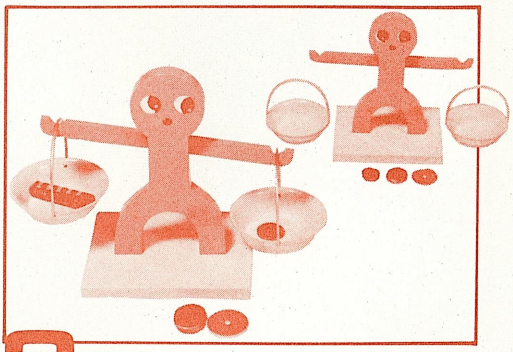
6月 かんさつケース
（虫かご兼用）



12月 むしぐるま
（ゴム動力）



8月 みずでっぽう
（鉄砲・ポンプ併用）



2月 はかり（天秤式）

フレーベル館

お子さまの成長に合わせてお選びください

情操をゆたかにし創造力をのばす
キンダーブック 1 ー情操
4月号〝くまさんと いちご〟
付録・つばめのおうち こいのぼり
団体購読価 **150円**

観察の眼をそだて心情をゆたかにする
キンダーブック 2 ー観察
4月号〝おひさま〟
付録・つばめのおうち こいのぼり
団体購読価 **200円**

科学する心を育て自然に親しませる
しぜん ー キンダーブック 3
4月号〝きんぎょ〟
付録・こいのぼり
団体購読価 **200円**

フレーベル館の 6大月刊誌 51年4月号

幼児の心を育てる
キンダーおはなしえほん
4月号〝やさしい ひつじかい〟
付録・こいのぼり
団体購読価 **200円**

園児をもつ母親のための専門誌
ホームキンダー
団体購読価 **150円**

保育をゆたかにする
実践的保育専門誌
保育専科 定価 **300円**

☆くわしくはフレーベル館代理店・支社・支店・営業所、または本社営業課 TEL 東京(03)292－7781(代)にお問い合わせください。